

古史傳

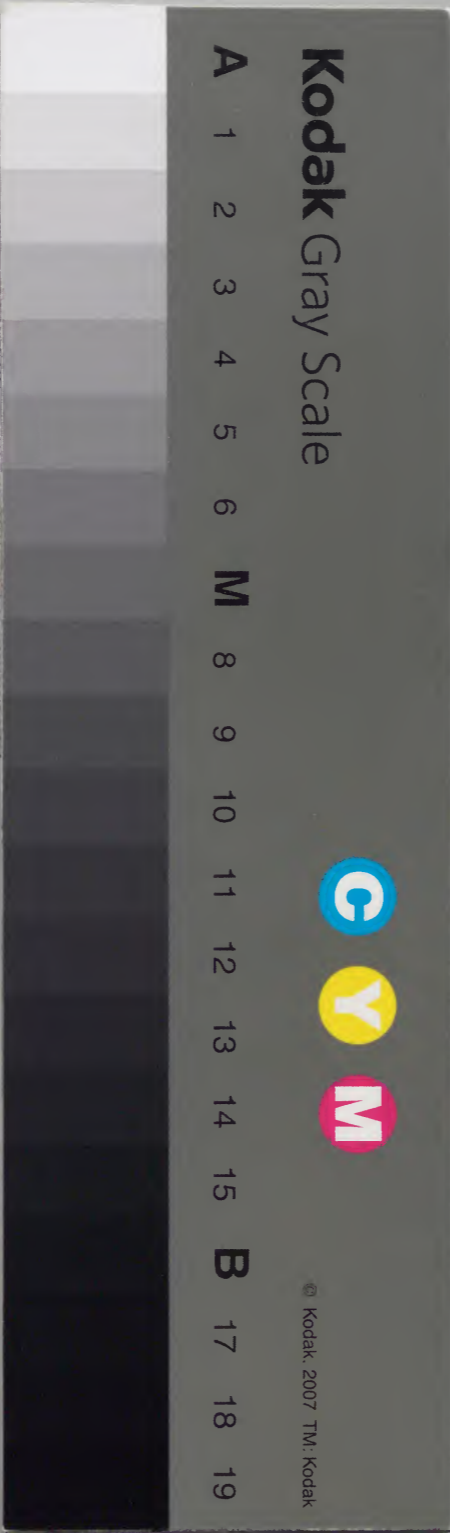
自第八十段
至第八十八段

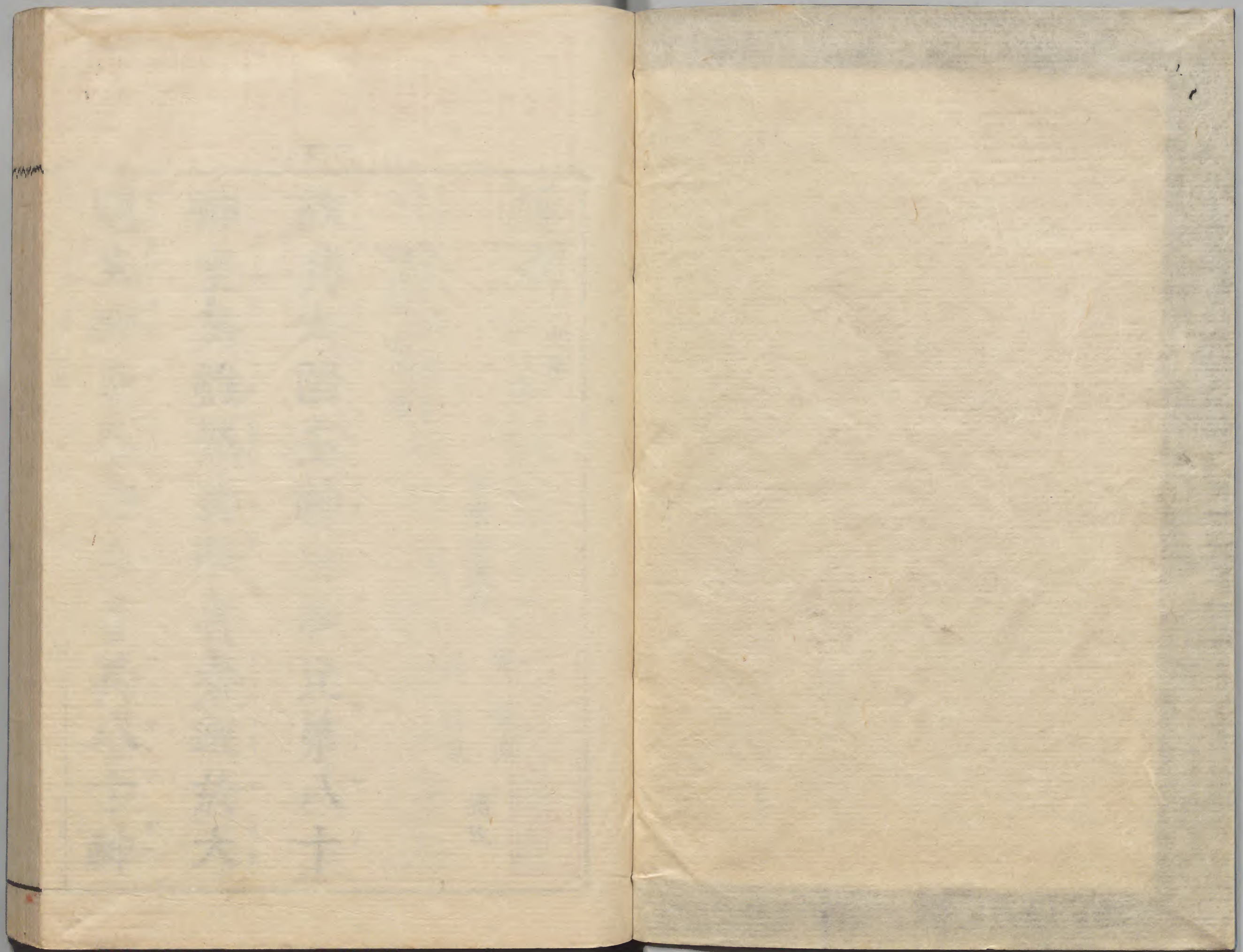
十七

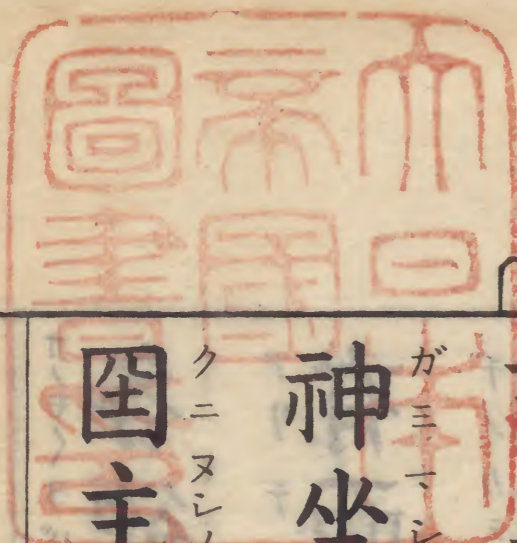
和書門			
二二	二三〇	一五〇九	類
冊	架	函	號

內閣文庫			
二九	二	一五〇九	和書
函	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 15091
冊數	22 (17)
函號	269 105







古史傳十七出卷

神代中九出卷

平篤胤謹撰

淺草文庫

男 鐵胤

續攷

孫 延胤

十八

故其大國主神出庶兄弟八十

神坐矣。雖然皆國者奉避於大

國主神矣。奉避由者其八十神

○古史傳十七

○一

各欲婚稻羽出八上比賣出心
オノモクヨバハムイナバノヤガミヒメラノコハロ
有而共行稻羽出時於大名牟
アリテトモニユキイナバニケルトキニニオホナム
遲神令負帑爲從者而率往矣
チノカミオフセフクロラシトモビトトテヤテユキキ
於是到氣多出前時裸出菟伏
コ、ニイタルケタノサキニトキニアカハダナルウサギフシ
也爾八十神謂其菟云汝將爲
タリコ、ニヤソガミイヒソノウサギニケラクイニセム

者浴此海鹽當風吹而可伏高
ハアミコノウシホラアタリカゼノフクニテテヨトフレタカ
山出尾上云故其菟從八十神
ヤマノヲノヘニイフカレソノウサギマ、ニヤソガミ
出教而伏矣爾隨其鹽出乾而
ノヲレフルシテフレキコ、ニマニマソノレホノカワクニ
其身皮悉風見吹拆出故痛苦
ソノミノカハコトぐニカゼニエフキサカレカラニイタミ
而泣伏則最後來出大名牟遲
テナキフセレバイヤハテニキマセルオホナムチノ

カミ三ノウサギヲテトヒタマフニナゾモイマレナキフセ
神見其菟而問言何由汝泣伏
ルトウサギマラサクアレアリオキノシマニテドモホリツレ
耶菟答曰吾在淤岐嶋而雖欲
ワタラマクコノクニニナカリムワタラヨシレユヱニアザムキワタナル
度此地無將度因出故欺海出
ワニヲテイヒケラクアレトトイマレテムクラベトモガラ
和邇而言出吾與汝欲競計族
ノオホキスクナキラカレイマレハソノトモガラノアリノコトゴトヤテ
出多少故汝者其族出在悉率

キテヨリコノシママデケタノサキミナテヨナ三
來自此嶋至氣多出前皆可列
フレワタリアレフミソノウヘラテハシリツ、ムヨミワタラ
伏度吾蹈其上而走乍將讀度
コ、ニトアガトモガラムシライヅレオホキト云コトラカク
於是與吾族將知孰多事如此
イヒシカバエアザムカテナミフセリシトキニアレフミソノ
言則見欺而列伏出時吾蹈其
ウヘラテヨミワタリキテイマスルオリムトツチニトキニアレ
上而讀度來今將下地出時吾

イヒイマシニ アレエ アザムカツトヲハレバ スナハチフセルイヤ
云_レ汝爲_レ我見_レ欺焉_レ竟_レ則_レ即_レ伏_レ最_レ
ハシニワニ トラヘアラテコトグニハキアガキモノヲキ
端_レ和_レ邇_レ捕_レ我_レ而_レ悉_レ剝_レ我_レ衣服_レ矣_レ
ヨリコレニテ ナキウレヒシカバサキダチテイデマセルヤソ
因_レ此_レ而_レ泣_レ患_レ則_レ先_レ立_レ行_レ出_レ八十_レ
ガミノミコトモチテアミテウシホヲアタリカゼニテフセレ
神_レ出_レ命_レ以_レ而_レ浴_レ海_レ鹽_レ當_レ風_レ而_レ伏_レ
トヲシヘタマヒキカレゴトヲシヘノセシカバアガミコトグニ
焉_レ。誨_レ告_レ矣_レ。故_レ如_レ教_レ爲_レ則_レ我_レ身_レ悉_レ

エソコナハツトマヲシキコ、ニオホナムチノカミ
見_レ傷_レ焉_レ白_レ矣_レ。於_レ是_レ大_レ名_レ牟_レ遲_レ神_レ。
ヲシヘソノウサギニタマクイマトクユキコノミナトニテモテ
教_レ其_レ菟_レ曰_レ。今_レ急_レ往_レ此_レ水_レ門_レ而_レ以_レ
ミヅアラヒナガミヲテスナハチトリテソノミナトノカマノ
水_レ洗_レ汝_レ身_レ而_レ即_レ取_レ其_レ水_レ門_レ出_レ蒲_レ
ハナヲシキチラシテコイマロビソノウヘニテバナガミゴト
黃_レ敷_レ散_レ而_レ輾_レ轉_レ其_レ上_レ則_レ汝_レ身_レ如_レ
モトノハダノカナラズナムイエモノゾトヲシヘタマヒキカレゴトヲシヘノ
本_レ膚_レ必_レ可_レ差_レ者_レ也_レ。教_レ矣_レ。故_レ如_レ教_レ

爲則其身如本也。故其菟白大

名牟遲神云。此八十神者。必不

得八上比賣。雖負帑。汝命獲出

白矣。此稻羽出素菟者也。於今

謂菟神也。

セレカバソノミゴトクニモトノナリキカレソノウサギマラレオホ

ナムヂノカミニケラクコノヤソガミハカナラズジ

エタマハヤガミヒメラドモオヒタヘフクロラナガミコトソエタマハムト

マラレキコレイナバノシロウサギトイフモノナリニイマ

イフウサギガミト

庶兄弟ハ麻ハ阿邇於登と訓法し。字鏡ハ庶兄万ハ兄也

あ也。麻ハ庶字を書こせ師説ハ漢因みて庶字ハ嫡よ

生倭を庶子といふさまむ庶兄弟と云嫡妻の生る子此

妾の生る兄弟を云称あり然れども皇因りてハ嫡庶を

論抄凡て異母の兄弟を麻ハ兄麻ハ弟と云ハむま和

名抄ハ継父万知ハ継母万波ハ見え古も今

も非所生子を麻ハ子と云ハ今言ハ非所生親子の間を

麻ハ志伎中と云也。記此一段ハ都て師説をもて

己ダ注せるをハ篤胤云と記して別ち於ハ八十神也。

師云多祀を云然也。必八十柱と限を倭ハ是非也。明

宮段末ハ故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣皆不得婚と

何倭ハ同じ考合せて知法し。神代紀ハ八十諸神垂仁天

有るも同じるハ神と下ハ式ハ阿波国美馬郡ハ八十子神

社とあるは。前後の神社を合せて思ふ。伊邪那岐大神
此多く此御子を申はらむ。ちて舊事紀ふ。此の八十神
を事八十神とて。一神此名
ふちとゆを。例此ひが事あり。次文ふ。皆
とも各とも共議とも有ふてあるし。 ○皆因者奉避於
大因主神矣。師云。おは後の事を先言おきて。次ふ其然依
所以を。初よ。具ふ言ふ。此、次より。下文の。每坂御尾追伏
每河瀬追撓而因作始矣。とある
処まで。皆そ。皆そ。八十神皆お。因。此天下を云。避とは。
下ふ大因主神の事。避てふ。おや此許多何依。自退て。
讓。避を。おそ云。依。此は下文の事。とも。我見るふ。ちよ
非。競争。おれども。及。む。負て退き。避れ。依。お。若くは
因主神。よ。帰。服て。自。避し。事の。有。○稻羽。師云。因幡。因
し。記。ふ。漏。お。る。ふ。も。や。有。ら。む。

己。彼。因。法。美。郡。ふ。稻。羽。伊奈波 郷。あ。ま。む。是。と。出。と。依。因。名
依。依。し。名。義。を。稻。葉。と。出。ら。む。○八上。比。賣。師。云。和
名。抄。ふ。因。幡。因。八上。夜加美 郡。あ。は。此。と。出。お。る。名。お。は。
を。此。比。賣。神。の。坐。し。処。ある。故。ふ。地。名。と。あ。れ。依。う。
其。本。末。を。辨。げ。と。し。万。葉。四。ふ。八上。采。女。も。見。也。 ○欲。婚
云。く。は。師。云。用。婆。波。牟。能。心。有。氏。と。訓。依。し。此。言。は。八。千。示。
神。此。御。歌。ふ。佐。用。婆。比。と。何。依。處。ふ。委。く。云。べ。し。第九十八
段の傳見
し。○共。行。を。出。雲。因。と。出。行。お。依。べ。し。○令。負。袋。は。和。名。抄
ふ。蔣。魴。切。韻。云。袋。囊。名。字。亦。作。袋。和。名。布。久。路。ま。と。唐。韻。云。
騰。囊。之。可。帶。也。和。名。於。比。不。久。呂。お。ま。ら。共。ふ。行。旅。具。ふ。載
と。れ。む。古。は。旅。用。物。を。袋。ふ。入。て。從。者。よ。齎。せ。行。と。見。え。と

巳。蜻蛉日記あどふ。餌袋メ菓子あど入て。旅メもとる事
見えとり。餌袋の名を鷹トより出たら免と。其メ種々物
入メゆる古メ旅メ袋メを持。西宮記踏歌装束條子。以衛府
ある事の遺れ依あるべし。
官人爲持袋者装束如常と見え。まメ禁秘御抄得選條子。
同車是不可然事。雄略天皇紀。根使主を罪メおひ給ひて。
第一也とあり。其メ子孫を賜茅渟縣主爲負囊者メとあり。賤者メ此役と見
えあり。或人云事功の人おおく依メ者メ世。○從者ハ登
母毘登と訓メはし穴穗宮段メ御伴人メともあり。書紀メ從
ともメ兼人ともあり。皆メけて同兄弟メ中メ。此神メしめ如此
賤メきはる小見役給へ依所由は。凡て大メれる功業を立メむ
をメ依人メは細事メおを拘メらぬメら。中メより人の云メはくお

從ふ物おまむ依メはし。此意は。次の手間山メ此事メても
見えあり。○氣多メ之前メ。因幡國氣多郡メ此海邊の崎あり。
○裸之は阿加波陀那流と訓メべし。垂仁天皇紀。裸伴此
云阿箇潘娜我等母と見え。雄略天皇紀。秃鷄メとも見ゆ。
○今云本よむ之字メおきを今。古妃歌。阿加波陀能山と
む此訓のナルメ不當メて加メ牙メ於メ。紀メ伐メ湘山樹メ其山メとあり。まメ波陀加メと云メ。膚メ顯メ本
紀メ阿加波陀を上下メ云メ言メあり。然メるを阿加波陀加メと云メ。
は此を意得メぬメひメ言メふメ由メ外メ。同言の重メあるメぞメりメし。
と右メ引メる垂仁紀メ訓注の我字メむメ之メの意メあり。思メひ誤メるメあ
と勿メ引メる。此メ毛メ無メを云メ。○菟メ此方メ古書メおは。免メを
多くは菟と作メ。漢籍メよもけり例メありて。字書メよも相通
と云メる。必メ有メれど。そは誤メおめと或書メふ

云巴菟を兔とは作^レ菟^ク、兔を菟とは書^カまじ
きと^レ此^レ巴^カぞ^レ信^フふ^レも有^ベき事^ナあり。加茂翁云万
葉十四東歌ふも今^レ此^レ田舍^カ人も^レ乎^ハ佐^サ藝^ギと言^フば然^ラ訓^ベ
しと云^キ死^ス然^ラれど凡^テ古書^ニふ^レ宇^ウ比^ヒ假^カ字^ナふ^レ此^レ字^ヲを用^ヒ
依^レを思^フば^レ形^ノ不^ク宇^ウ佐^サ岐^ギぞ^レ正^シしか^レ巴^カ依^レ天^テ武^ブ天^テ皇^ス紀^ニふ^レ
置^キ始^メ連^テ菟^トと云^フ人^ノ名^ヲをも元^ノ正^ノ天^ノ皇^ノ紀^ニふ^レ宇^ウ佐^サ岐^ギと書^カ
ぬ^レ巴^カ乎^ハ佐^サ岐^ギを本^トと^リ和^ノ名^ヲ抄^シふ^レ四^ノ聲^ノ字^ヲ苑^ニ云^フ兔^ノ似^シ小^ノ犬^ノ而^シ
長^ノ耳^ノ缺^ク脣^ノ和^ノ名^ヲ宇^ウ佐^サ木^キと^レ阿^フ巴^カ篤^ト胤^ノ云^フ此^レ引^レれと依^レ和^ノ名^ヲ
抄^シを常^ニ此^レ印^ノ本^ト依^レぐ^レ古^ノ本^ニふ^レは^レ兔^ノ他^ノ故^ヲ反^シ亦^シ作^ス菟^ト似^シ鼠^ノ大^ニ
長^ノ耳^ノ缺^ク脣^ノ毛^ヲ可^ク爲^ス筆^トと^レ阿^フ巴^カ此^レも^レ菟^ノ兔^ノ通^スを^レし用^ヒと^ル
去^クぞ^レ知^ラば^レ字^ヲ書^クぞ^レも^レ不^ク菟^ノ兔^ノお^レど^ノ字^ヲ与^フ兔^ノ同^クとも^レ兔^ノ子^ト
也^トとも見^エま^レと菟^ノ字^ヲも^レ兔^ノ子^ト也^トぞ^レ阿^フ巴^カ加^ク

て此^レ獸^ノの^レこ^ト猶^シ末^ニ委^ク云^フべ^シ○爾^ニ八十^ノ神^ノ謂^フ其^ノ菟^ト云^フ云^フ此^レ上^ニふ^レ菟^ト
裸^ニて^レ伏^スる^ノ所^ヲ以^テを^レ八十^ノ神^ノの^レ問^フ言^フ次^ニふ^レ菟^ト答^フと^レ依^レ言^フ
お^レど有^レば^レき^レ残^リ其^レは^レ次^ノの^レ大^ノ名^ノ牟^ノ遲^ノ神^ノの^レ問^フ賜^フへ^ル處^ニふ^レ委^ク
曲^クよ^レ舉^ゲて^レ此^レふ^レを^レ省^クる^レ巴^カ抑^シ前^ニよ^リ言^フて^レ後^ニよ^リ省^クる^レそ^ノ文^ノ章^ノ
言^フる^レを^レ凡^テ大^ノ名^ノ牟^ノ遲^ノ神^ノの^レ事^ノ業^ヲを^レ主^トと^レ語^ル故^ニ其^レ處^ニを^レ委^ク曲^クふ^レ云^フる^レお^レり○將^シ爲^ス者^トを^レ勢^ノ牟^ノ波^ノ
と^レ訓^シば^レ可^ク爲^ス様^ト者^トと^レ云^フむ^レが^レ如^シ○海^ノ鹽^ハは^レ宇^ウ志^シ富^トと^レ訓^シ
ば^レ塩^ヲを^レ借^リ字^トふ^レて^レ齊^ノ明^ノ天^ノ皇^ノ紀^ノの^レ大^ノ御^ノ歌^ニふ^レ于^レ之^ノ裏^ニ見^ル
也○尾^ノ上^ノの^レ去^クを^レは^レ朝^ノ倉^ノ宮^ノ段^ノふ^レ云^フべ^シ○可^ク伏^スを^レ今^ニ云^フ本^ニ
ふ^レ伏^ス字^ヲれ^レみ^おす^レ其^レを^レ師^ト此^レ布^ノ斯^ノ氏^ト余^トと^レ訓^シれ^ル多^クる^レ氏^ノ余^ノふ^レ
當^ル可^ク字^ヲを^レ加^フ牙^ト也○從^テ八十^ノ神^ノ之^ノ教^ヲ而^シの^レ而^シは^レ爲^シ而^シ此^レ意^ヲ

亦正。○乾の假字は。字鏡の燥字此下。可和久也。○
 其身皮とは。膚を云亦正。其故也。上。裸と見え。下文亦悉。
 剥我衣服。や。あれ。毛。此付。と。る。皮。を。無。れ。を。形。め。○痛苦
 は。伊多美氏と訓べし。抑。去。の。菟。は。八。十。神。此。多。米。何。の
 怨仇。お。ら。ぬ。を。か。く。今。惱。る。を。甚。も。惡。有。神。と。ち。也。凡。
 由。亦。き。不。善。人。の。為。る。事。亦。ゆ。り。し。○最後は。伊夜波氏
 也。訓。は。支。由。前。よ。云。ぐ。如。し。第二。十。段。の。○於。岐。嶋。を。隱。岐
 圍。亦。正。○和。邇。和。名。抄。亦。麻。果。切。韻。云。鱈。似。鱉。有。四。足。喙。長。
 三尺。甚。利。齒。虎。及。大。鹿。渡。水。鱈。擊。之。皆。中。斷。和。名。和。仁。と。云。
 正。今。云。斷。字。古。本。此。魚。此。也。と。古。書。亦。多。く。見。也。宇。治。拾。遺
 亦。折。と。あり。

亦落入。る。足。を。和。迹。の。喰。切。る。を。其。和。迹。扱。ひ。亦。虎。よ
 く。ひ。殺。さ。れ。と。依。物。語。を。此。せ。と。り。○今。云。こ。の。事。拾。遺。よ
 正。云。古。く。今。昔。物。語。亦。見。え。ぬ。亦。ま。と。同。物。語。亦。私。市。宗。平。
 と。云。相。撲。人。の。最。手。あり。る。が。背。を。射。ら。れ。と。依。鹿。此。海
 を。渡。り。て。向。此。山。様。よ。逃。け。依。を。宗。平。立。瀬。を。し。て。鹿。亦。追
 付。て。其。尻。足。を。取。て。肩。亦。う。り。て。游。返。る。亦。鱈。の。追。來。れ。
 尤。二。度。亦。鹿。此。頭。と。前。足。と。を。噉。せ。て。三。度。め。亦。宗。平。鹿。の
 尻。足。を。鱈。の。口。亦。入。依。は。亦。投。上。と。る。亦。人。を。集。り。て。射。殺。し。
 亦。あり。て。其。鱈。を。陸。様。亦。投。上。と。る。亦。人。を。集。り。て。射。殺。し。
 鱈。斯。て。宗。平。亦。何。亦。し。て。噉。れ。ざ。り。於。と。問。々。亦。其。殘。ある。
 物。を。噉。て。亦。其。處。亦。多。噉。矣。し。て。已。が。樞。亦。置。て。其。殘。ある。
 字。ま。と。噉。亦。來。る。亦。其。を。知。て。前。度。亦。鹿。の。頭。を。噉。せ。
 次。度。亦。前。足。を。噉。せ。て。遣。り。於。後。亦。來。れ。亦。手。を。放。ち。て。噉。
 せ。て。投。上。と。り。案。内。を。知。ざ。り。者。亦。一。度。亦。手。を。放。ち。て。噉。
 し。む。亦。故。亦。次。度。亦。我。噉。依。亦。力。亦。云。事。亦。有。正。
 て。噉。せ。亦。程。亦。必。突。倒。れ。亦。此。亦。人。の。心。付。甚。大。亦。依。が
 此。魚。の。こ。と。書。等。亦。多。う。ま。ぎ。此。亦。人。の。心。付。甚。大。亦。依。が
 亦。成。成。亦。事。亦。れ。亦。文。を。畧。き。て。注。し。出。於。亦。甚。大。亦。依。が
 有。と。見。え。て。記。中。亦。八。尋。和。邇。亦。何。正。漢。籍。亦。長。三。丈。

國の海小を今も和迹多しと云也。また遙はと熊罴とは。西此外圍くよめ此魚多き処ありと云り。其猛を云る稱也。凡て熊某を云をみお猛を云る例ちて此小海と云依之。菟ハ陸の物小て海を渡らむの謀を語る處おまむ也。○族を登母賀良と訓べし。此字は書選まよ夜加羅と訓れども此を親菟の族を之。闔島の菟也も皆をいひ。和邇の族とは。舉海此和邇ども皆を云るおれむ也。書紀十一。虬之黨類。まよ諸虬族と何依もよ。属類。黨類。徒黨。同伴。○多少は於本伎須久那伎と訓べし。○欲競計をば。久良辨氏牟と訓べし。○在悉。阿理能許。登基登と訓べし。有限不遺。云意也。○方葉五。布可多。衣安里能許。

等其等伎曾倍騰。○列伏度。まの度也。此處を也。彼處まで。續くを云也。彌巨字を訓る意也。○走乍。凡て乍字。古書。ふは。必都。と訓む例あり。都くは此事と彼事と相交ると也。其間。小置く辭也。此を走もし讀もして。二事を相交りて爲る也。故この乍字を後世も那賀良とも訓あり。凡て都くを那賀良と通ひて聞ゆること多し。物語。文れども必都くと云べきを那賀良と云へる例あり。○近世の哥。ふ而を云。ほき。処字。都くを詠こと多し。おを誤。お。都くと云。べきを。氏と云。むを可し。氏を云。ほきを。都。都と云。ぐと云。し。此意をよく辨ふべし。近世。○將讀度。哥作人のいふ都の説を叶を然こと多し。○將讀度。讀を數計也。万葉四。小月日乎數。而まよ七。浪不數。爲。而まよ十一。小時守の打鳴。鼓數見れむ。おれら今本の訓を皆誤まむ。

はと十三ふ。吾睡夜等を讀も敢むるも。今本を讀をはと
十七よ月日餘美都追かく假字ふめ書今世も錢をばとむと
けて此度を上るはと異にして。渡行を云子り。
○與吾族云く右に如く爲らむふは實よ和邇の族に
數をば。知れども菟の族に數を知れきあらぬ。此
上よ。然後吾亦族在悉率來將列伏爾汝云く讀度おと云
語も有べきふ。其在今菟此身上を語るふ用無まむ畧る
依小こそ。○今將下地之時。凡そ今と云よ三意あり。一ふ
は。字に如く常云ふ今あり。二ふは。今一ふと云て。有ぐ上
ふ猶添むとけるを云。三よを將然こそ此近きを云。俗よ

てとも。おちけとも云ふ。今返來むあど云是れ也。此よ
同じ。即今ふとも云れぬ。今返來むあど云是れ也。まよ
一ッ意あり。今早くも催すよいふ是あり。まよ今者。あは
と云て。今を此ぞ限と云意よ用ふることに有。あは
其意ふて。地下むむける程の近きを云。下地は。和邇
の背、上よ。氣多前の地下下るを云。○最端も。伊夜波志
を訓ぜし。俗小一端と云ふとれ也。○我衣服とは。毛に付
依皮を云ぬ。あは人小準子て。衣服と云る。又は伎母
能とむ。凡て膚をちみ藏物物の名ふて。人の著る衣服
此みの名ふを非る。まよ蛇の伎奴と云こと有。○患は
假字也。二代實錄十三のふ。憂禮比とあり。宇禮閉ふ非は。
○命以て。以御言あり。初よ天神諸命以て。○見傷焉は。上よ

其身皮悉風見吹折之故痛苦と何依を云也。曾許那波延

都と訓べし。但し此も記傳の説あるが本もた傷字此み

二字を○今急おの今は速くと催し起る意あ也。○以水

洗を。淖氣を去む多米ふ眞水ふて洗はしき依あるはし。

上の交際あはく。水門を河の海に落る戸口はて河と海を

河と方へて云て。淖の交らぬ所と云はし。然らるゑいふ

河と此は海辺あまむ。○蒲黄。和名抄よ。唐韻云。蒲草名似

藺可以爲席也。和名加末。陶隱居本草註云。蒲黄蒲花上黄

者也。和名加末乃波奈と何也。直よ波奈と云る也。此方小

天を別よ黄粉の名を無くて。其をも花を云依あるべし。

さて漢籍ふも蒲黄ハもはら治血治痛薬也。本此

神の靈小頼て上代より然傳りし物あり。○今人た加を

濁りて賀麻といふ。凡て頭を濁る言れし。今も蒲生と

云地名あぢは清を。○輾轉則を許伊麻呂毘氏婆を訓は

以て古を知べし。○萬葉三卷ふ。展轉と見也。十卷ま十三許

伊を臥伏を云て。はと万葉よ反側臥有あども多く見也。

假字は許伊れ也。此も万葉小何也。鳥宮段此哥許夜流と

有る也。○如本膚和名抄よ。膚體肌也。和名波多と何也。異

小云。記よ。膚加波辺字鏡よ。肌膚也。加波辺和名抄よ。肌膚肉也。

和名加波倍あども有まど。あも波陀と云るまど。古言ふ多

訓べし。然本膚を。見吹折と依が差合のみあらば皮も

毛ぬ。本此如く小成を云あ也。○可差者也。今云伊延那

牟毛能敘と訓はし。差は愈れぬ。本よ差字のみあるを

て可者也の三
字を加す於 ○如本也は本之如爾爲伎と訓はし。たま
薬方の物小見えと依始あす書紀ふ此神を少彦名命と
蒼生はと畜産の爲ふ其病を療は方方を定給ふを阿す世
人病ま多傷あどを治絶むとせむ此神の恩頼を仰ぐふ
如事然し今も鳥虫あぞを身の病ま多傷癩あどある時
幽ふ此神の靈ちひ賜ふを人の中くふ己がけり
しら心以て理よ溺とる漢の方を用る病も何も
治まること希あり漢の上代を理よ泥交て古の傳ふ
任せてせし不ぞよ験炳焉りしは自此神此靈よ頼し
○其菟白云く此言此如く果して八上比賣をば大名
牟遲神の得給子依む此菟の靈幸ひあ依はるまむ實ふ
神ありんす○汝命ハ那賀美許登と訓べき由上よ云依

ぐ如し。さて此下かれらる曾と ○稻羽之素菟は此
云辞を讀付べき処あり ○然らざれば次よまとい謂
故事を語る時の名目あ依はる菟神とあるふ重ありて
いか けて此菟れ白れす事を上文よ言はして此處
ふしも俄ふ素菟と云依むいけり心得ぬ書ざはるす
故思よ素をもまは裸の義よは非じう若然も有らむ
志呂とは訓まじれ異訓あす人あ布考すてと塵添
抄よ因幡記と云書を引て此兔の故事を記せる此記の
趣と同じ但し其始を高草郡此竹林此竹の中ふ老とる
兔住るるよある時洪水いで來て此竹林流れよき兔竹
の根ふ乘て流まて隠岐島よ著ぬ水うさ落て後本此所
よ歸らむと流れど渡るべきに居あし其時よ水中ふ鱈
阿め兔鱈ふ云やう云く是より後の事を此記と同じ因
幡記と云を風土記 ○謂菟神あ此神社今も有やくはし
あぞを云るよや

く圀人ふ尋ぬば事なり。伯耆、圀人、の云く、本圀八橋郡
須佐之男命を祭ると云、同村、の神主、細谷大明神と云あり、大
名持命を祭ると云、件、神ありと云て、其、和、と、此、諸、人、
其、鷲、大明神、を、瘡、守、神、ありと云て、其、和、と、此、諸、人、
何、ふ、ぎ、守、み、て、小、兒、此、瘡、守、神、ありと云て、其、和、と、此、諸、人、
よ、此、願、を、立、る、と、死、よ、此、社、小、兒、瘡、守、神、ありと云て、其、和、と、此、諸、人、
帰、り、て、家、内、よ、斎、ひ、置、て、そ、小、兒、瘡、守、神、ありと云て、其、和、と、此、諸、人、
れ、む、賽、ふ、同、じ、ち、ま、の、笠、を、今、一、蓋、添、て、初、の、と、共、よ、う、の
社、よ、返、し、納、奉、る、此、笠、を、今、一、蓋、添、て、初、の、と、共、よ、う、の
と、後、祈、り、納、奉、る、此、笠、を、今、一、蓋、添、て、初、の、と、共、よ、う、の
積、の、何、と、り、か、く、木、江、川、と、一、蓋、添、て、初、の、と、共、よ、う、の
処、塩、津、浦、と、り、か、く、木、江、川、と、一、蓋、添、て、初、の、と、共、よ、う、の
因、幡、此、氣、多、郡、を、伯耆、の、氣、多、郡、と、東、積、村、と、五、六、里、隔、と
れ、り、と、語、め、死、此、因、幡、の、氣、多、郡、と、東、積、村、と、五、六、里、隔、と
若、を、禱、神、也、此、段、此、故、事、ふ、縁、何、事、れ、ゆ、和、名、抄、よ、る、瘡
瘡、を、禱、神、也、此、段、此、故、事、ふ、縁、何、事、れ、ゆ、和、名、抄、よ、る、瘡
ふ、束、積、郷、を、汗、入、郡、と、東、積、村、と、五、六、里、隔、と
属、依、水、門、あらむ、う、猶、と、く、尋、ぬ、べ、し、貝、原、好、古、和、爾、雅
取、し、水、門、あらむ、う、猶、と、く、尋、ぬ、べ、し、貝、原、好、古、和、爾、雅

てふ物ふ伯耆、圀素菟、大明神と云を、
載、と、る、も、彼、社、を、云、る、ふ、も、や、有、む、と、言、れ、ぬ、依、ぐ、追、繼
此、考、ふ、出、雲、圀、意、宇、郡、大、庭、神、魂、社、神、主、秋、上、得、圀、云、素、菟、
神、也、今、も、因、幡、圀、高、草、郡、の、海、邊、内、海、村、ふ、白、菟、社、と、て、何
也、今、は、高、草、郡、あ、ま、ど、も、氣、多、郡、ふ、並、び、て、氣、多、崎、の、内、あ
ゆ、か、の、伯、耆、あ、る、鷲、大、明、神、と、云、を、出、雲、大、社、ふ、も、同、名、此
社、あ、り、て、瘡、瘡、を、祈、る、神、あ、り、菟、神、を、其、よ、を、非、交、○今
云、杵、築、大、社、記、よ、鷲、宮、を、俗、よ、素、蓋、鳥、等、の、妾、ふ、て、坐、り、と
云、ふ、昔、兒、童、ふ、託、し、て、我、を、祈、ら、む、瘡、瘡、此、患、を、免、れ、む、を
有、し、と、め、瘡、瘡、守、護、を、云、牙、也、死、と、有、也、○此、條、ふ、免、此、言
神、と、あ、り、と、云、へ、り、を、云、牙、也、死、と、有、也、○此、條、ふ、免、此、言
語、へ、依、を、始、免、下、ふ、谷、具、久、鼠、あ、む、も、言、語、し、と、る、事、あ、り、
猶、神、世、ふ、然、る、類、の、多、う、依、を、人、此、甚、く、不、審、み、思、ふ、免、る
は、幽、顯、此、理、を、熟、悟、り、得、ざ、る、故、あ、り、也、
○古史傳十七
○十四
○此、條、は、第、百、七、

三段の傳ふ委く其はまば鳥獸万物を元よ正深き所以
注をを見るべし其はまば鳥獸万物を元よ正深き所以
あ正と見えて神フ屬ツく物フし有まば幽顯イまど分れ
ざめし大國主神の御世までは悉く神フ物白しけむを
然も有まき事正然るを天皇祖神とち此御命もちて
皇美麻命を顯明事を治看し大國主神を幽冥事治看
以あやく分正定めて後物等を顯カ形こそ見ゆれ實を
幽フ屬ツ故フ顯カ世人は言語は成成ふあは神世
よ物の言語へる故事を疑ふ事とを成成るあ正凡て物
屬ことを家あまれ処まま火災何依時をそ此豫み其
辺不住む鳥獸あどの他子避往を思ふべし此を其災を
人の過りて為出たるふ乃れ盜往を思ふべし此を其災を
宋を幽事あ依故み彼等をよく知て避往くみあむ此を

未其氣の立現る故ありれど云むを猶末のことぞ
も案よ其氣此立現る故ありれど云むを猶末のことぞ
ちめ給ふりて殊よそを人を知らむも其やがて神此立
知こそ奇なれ然れど物は幽に屬て神よ言語ふこと死
あし猶言は雜犬あどの類人の畜べく定れるは其死
骸の見ゆるを然らぬ限はそ此死骸とて一ど有こ
とれ其を飛て何処ふう往らむあども云はる
まぞ大あ依獸も多うるを彼等を皆いうふ成れらむ熟
思ふべし希くふ死骸のあるは自死と依みを非で物ど
ち相殺しとる人此態に懸れ依あどれり是を以て予鳥
くより世に鳥獸を神に使者と為給ふ形ぞ云ひ予が鳥
獸万物を幽冥に屬てふ説れ証言らぬことをも辨布
し然れど今世も時としては人此夢入りて言語ふ
事の正其は夢よは神の幽通ふこぞ有れむ正かの
津父が助りし狼此欽明天皇の御夢を誨白して大津
父を官位を賜をし免とる類を思ふはまと夢よ幽の
託を物よ正聞ふと未多物も人形と變ては人此言語を
古も今も甚多う正

凡し神も物の形と變ては言語をば其物どけの力を
 依事もいざ多うゆ。狐狸あど人形と化て能言語ふこ
 る龍を困史も萬農池神と有て從五位下を授らま
 依神あるふ小蛇と化しうむ比良山の釈魔此鷄と化れ
 るま搔抓れて食まむせし比叡山此釈魔古屎鷄やあ
 めて童部等又縛り擲らきて殺さまむと為なる類の物
 語書ふ多うるおれら怪し死ぐ中ふぬやも奇異なる事
 を熟思ふべし。おれら怪し死ぐ中ふぬやも奇異なる事
 あり。幽ふを定終ある事を依るまど。凡人此心もて
 は其理を如何とも探
 正索むべき由あり。

於是八上比賣答八十神云吾

不聞汝等出言將嫁大名牟遲
 神云故爾八十神怒而將殺大
 名牟遲神共議而至伯耆國出
 手間山本而云者此山赤猪在
 也故和禮共追下則汝待取若

ズマチトラハカナラズムトコロサイマシライロテニタル平ニ
不待取則必將殺汝云而似猪

オホイシラモテヒラヤキテマバシオトシオホクダリキカレ
大石以火燒而轉落追下矣爾

トルトキニニノイシエヤキツカテマガリキカレ
取時於其石所燒著而死矣爾

ソノミオヤノミコトナキウレヒテマ平ノボリアメニテマラレ
其御祖命哭患而參上天而請

カミムスビノミコトニタマフトキニスナハチオコセキサガヒヒ
神產巢日命出時乃遣蚶貝比

メトトラウムギヒメテシメツクリイカサタマフカレ
賣與蛤貝比賣而令作活虫爾

キサガヒヒメキサゲコガシテウムギヒ
蚶貝比賣伎佐宜集而蚶貝比

メモチミツラテヌレオモノチレルトバナリウルハシキヲト
賣持水而塗母乳汁則成麗壯

コニテイデアルキキ
夫而出遊行矣

答八十神云師云此前十聘せし事此有ほきを其字は畧
て。あふ其答を云る外也。然まど何とや。言。○不聞也。

承引じあす。○將嫁ハ阿波那と訓べし。那牟と云ふ同
じ古辭なり。此由上ふ。けて此を先小菟を惱しと依せ助
あると善惡き所爲を見て。其善よ心字歸とる。はゑ此
神を元よ万とを邪く勝とるからふ。何故とれく。靡と
る。如何まれ。彼菟の事ハ。もはら此妻問の事ふか。て
云。依あまむ。自菟れ靈を加ふる事ハ。前よ云ふが如し。○
手間山本和名抄ふ。伯耆國會見郡天萬郷あり。此あすば
ゑ出雲風土記意宇郡段よ。道通。因東塚手間刻と見え。今
因意宇郡筑野村。間瀉海中。手。古今六帖。關歌ふ。八雲立
間。天神と云ありと。或書よ見也。出雲國の手間關。いゑあるては。小君障ら。待たばし

人知見むや我せあす。留加。松てぞ手間と名おけし。堀川
院百首ふ。けすともせ思ひし。うづも八雲立て。万れ關ふ
も秋をせほらげ。因塚ある故ふ。伯耆とめ出雲ともせし
ふ依。ま。郷を伯耆。関を出雲よ。属る。う。い。う。ふ。ま。ま。
誤れる。別よはあらじ。○舊事紀。手向山とあるを。写
欺らむ。赤猪。神功皇后。紀ふも見也。今を石を火に焼て。
め見也。和名抄ふ。尔雅注云。猪一名。彘。和名并兼名。苑云。一
白猪も。○和禮共三字。連て和禮。杼毛と訓ふ。我とも吾
きを假字よ。書る。む。依れる。や。○追下。則下る。は。猪を下
は。非。猪を追て。八十神の下。依あす。同。言の。此。下。ふ。あ
る。と。考。合。せ。て。知

○待取を常小はあぐ待たくるを云て。取を輕言ふ
依を。此は取の言重し。山下小在て。待承て捕子よと云れ
也。○大石を意富伊志と訓はし。白檮原宮段の御歌。小意
斐志とある小依れ也。斐志富伊波と訓まじ。○轉落
追下矣。其の追下も八十神此下依れ也。上小云る言も應
ふ。もしこまを大各牟遲神の追下と訓る時ハ待取と云
るよ違へむありはと上よ云る追下も猪を下に非
ざと云るおと此と合せて心得べし。前後○爾取時ハ大
各牟遲神此待取也。出雲風土記。小意宇郡穴道郷。郡家
正西州七里所造天下大神命之追給猪像。南山有二。長
七尺。高一丈。周五丈七尺。一長。追猪犬像。長一丈。高四尺。其
二丈五尺。高八尺。周四丈一尺。

形爲石无異猪犬至今猶在故云穴道と云ふ也見也。今云
天下大神也。大各牟遲神あり。さて此穴道郷也。郡家西州
七里とあれむ。手間山と遙隔れむ。別事あり。本文
の傳也。いまだ大國主神をあり給ハざる時のおと。風土
記此傳は既大國主を成給ひて遊獵し給ひし時此事
と聞え。けりて此神のほと如此人此云はく。小爲給へる也
也。上此袋を負給ひしと同意れ也。○死を今云麻賀理と
ぬ。ほと直小斯邇とも訓はし。師を美宇勢給比伎を訓れ
亡とあれむ。古語あまどあ不斯迹。○御祖命也。大各牟遲
也。も麻賀理とも云ふぞ正しき。神此御母あまは。刺國若比賣也。記中凡て御祖とは母
を云る例れ也。山城國賀茂御祖。抑父此於夜あるは。本を
也。此事あは。母をしめ殊小云る所以也。子は母此許小

生長しれまむ。父とても親睦しく。同家小在る故。朝暮
此事ふふれても御祖とて先母を云しあ也。古事記の上、
不燃あと大方此あぐひあ也。侍て親と作ばして祖字を
書るは上よ云る如く。於夜に父母小限らば遠祖までよ
通ふ称ある故。此字をも訓也。さて言の同じきは
父母を云よも借て書るを古此例なり。統紀十五よ祖子
とも。明宮段。秋山之下氷壯夫。春山之霞壯夫とて兄弟
此神伊豆志袁登賣神を聘し處よ其母の種く計おちし
事也。此段と意く似たり。凡てかく依事とめく。父は
知れて中くふ。母此事執也知るおちるを殊よ親き故
あゆかし。○請神産巢日命とは上件の状を白して救活
え給はらむ事を乞ふ也。産靈此御名此意思ひ合はるし。

今云古事記中。神皇産靈神此御名を記せる例始也。
御名の出たる處と少毘古那神段よ久延毘古言小の
み神産巢日神也。有て其外に何処も何処も神産巢日御
祖命とて。そは此神を女神よて神のめと於御母よ坐
せをぬ。然るよ此處に御祖と云ざるを大名年遷神此
御祖と混むむことを思ひてあるは。猶此由を第一
段の傳ふ委く。○蚌貝比賣。蚌貝を伎佐賀比と訓也。和
注せるを見よ。○蚌貝比賣。蚌貝を伎佐賀比と訓也。和
名抄。唐韻云。蚌蚌屬。狀如蛤。圓而厚。外有理縱橫。即今蚌
也。辨色立成云。和名木佐とて依。これ本草小魁蛤とて
て。今阿加比と云物也。出羽国あるきけつとて云地
名をも延喜式小蚌方と書也。まよ倭姫命世記よ阿佐加
加多尔伎佐宇阿佐留とて
求も。蚌乎けつ出雲風土記。御祖神魂命御子。支佐加比
賣命とて也。一本よ支佐加比○蛤貝比賣。宇牟岐比賣

之訓はし。其故を御紀に。景行天皇東國を巡り賜し時。そ
お此海の白蛤を。贈り作て奉りし大を見也。姓氏録よて大蛤とあり
此を宇牟岐と訓也。此事を景行天皇ちて和名抄ふは蚌
蛤一名含漿。和名波万久理。海蛤。和名宇無木乃加比。文蛤。
和名伊太夜加比。と分て出せまとも。蛤と云を。波万具理
此類の介蟲どもの總名ふて。右の三漢名は彼國よても互に混ひて詳ふを分ざま
ば。此方よても。古人此心くふ當らむあまば。必しも右
此は。小定。ほきよも非び。○今云。信ふ此師説の如く。古
人む心く。身を當りゆれば。然るを今昔物語ふ品不賤人
去妻後返。棲語と云條。難波の濱辺を見行ける。蛤の
小やうある。海松。此房やうふ生出りゆるを見付て。
云くと。何。海松を美流貝よこそ生ま。波麻具理ふ生る
物ふた非。秘。此を思ひ合ひ。右此三の和名此中ふ
て書るあり。此を思ひ合ひ。右此三の和名此中ふ

宇牟岐ぞ蛤の古名あり。餘の二。其中よて。後分。さる
古く。餘此二を。字鏡ふも。蛭蠅妙丸ど。此字を。何れも宇牟
岐と記して。餘此二名は。凡て見え。され。本を。凡て宇
後。其。中。お。て。小。き。を。濱。栗。と。お。け。大。ある。を。本。此。は。お。
呼。び。文。ある。を。板。屋。貝。と。お。け。大。ある。を。本。此。は。お。
板。屋。根。葺。目。よ。似。と。依。故。の。名。ある。べ。し。儲。ま。と。後。よ。お。
ひ。よ。宇。牟。岐。て。ふ。名。を。亡。て。大。小。凡。て。波。万。具。理。と。云。あり。
きて。お。今。云。此。の。蛤。貝。を。延。佳。本。於。布。加。比。を。訓。る。お。
畧。死。お。記。傳。よ。出。雲。風。土。記。小。神。魂。命。御。子。宇。武。賀。比。賣。命。
就。て。見。べ。し。一。本。お。を。宇。牟。賀。○。遣。を。於。許。世。氏。と。訓。む。は。し。此
を。見。也。比。比。賣。命。と。あり。○。遣。を。於。許。世。氏。と。訓。む。は。し。此
を。彼。を。已。此。お。遣。は。れ。お。已。○。令。作。活。を。都。久。理。伊。加
佐。志。米。賜。と。訓。は。し。令。令。活。あり。活。を。大。名。牟。遲。神。係。り。
令。活。を。二。比。賣。ま。か。已。上。の。令。を。神

産巢日命ツルヒノミコ作ツクを繕治ツクリツクリす。固作ツクリツクリの作ツク此如し。○伎佐宜キサダは研キリ削ツクリす。和名抄ワナヒコに碾ツクリ岐キ志良シラを切ツクリて佐サを云イハひ。下シタ此志シを省シラふ。はと氣キ豆理ツクリを宜イと此コノみ云イハ例レイを。弓削ユミツクリを由ユ宜イと云イハふ是コノ也ナリ。脉源抄マクノチノチに笙シヤウ五管ゴカン名物ナモノ此コノ中ナカに幾ナニ佐サ云イハふ是コノ也ナリ。氣繪キエと云イハふ。蚶カキ界カイ繪エとも書イハれり。今世イマノヨ此言コノコト小物コモノを許コソ曾宜ソウイ流レを云イハふ。此コノ伎佐宜キサダ此コノ訛ヒソカまはゆマて意イを同ドウじ。○集ツクを。加茂大人カモノオホタチの考カウ予ヨ。焦キウ字ジの誤アヤマり。と何ナニゆユぞゾ也ナリ。死シ許コソ賀志カシと訓ツクリべし。蚶カキ貝カイ此コノ殼カラを研スリ磨リる。扱ツクリて燒ヤキ焦コカしてス也ナリ。今云イマノコト。此コノ集ツク字ジ。焦キウの誤アヤマり。と云イハふ。案アンを然シカる。説セツをゆユぐ。假借カキ本院ホノクニ侍從シヤウジヤウ語コトを云イハふ。條ジョウに艶エンズ思オモヒ集ツクレテ過ス又マタ云イハふ。と。ゆユ五イチ六ニ本ホンみミふ。集ツク字ジあり。然シカれ。む共トモに誤アヤマり。は非ヒと見ミゆ。今傳イマノツタヘむ。らぬ。字書ジヤクに集ツク焦キウ相通ツキアハる。由ユ有アルて。古人コノキミの用ツクリとる。ふ。

非ヒは。けケて今イマ如此カクして功イサを成ナせる。ふ因ユて。此コノ貝カイ此コノ名ナを伎キ佐サとは負オモる也ナリ。今云イマノコト。ふ不フ記キ持モチ水ミヅ而シテ眞マコト福フク寺ジヤウ本ホン延エン佳カヒ本ホン。小侍承コノシヤウジヤウとあれど。さて伎佐キサダ凡ツクリて蛤貝カキの中ナカに水ミヅを含フみ持モチとゆ物モノあり。蚌ヘイ蛤カキ一名イツナヒ含漿カンシヤウと漢籍カンシヤク。○塗ツクリ母乳ニウジヤウ汁シユ則ツクリ也ナリ。於オ母モ能ノ知チ志シ流ル登ト奴ヌ禮レ婆バと訓ツクリはし。母モを乳ニウ母モを云イハふ也ナリ。凡ツクリて於オ母モと云イハふ。親オヤ母モはハ乳ニウ母モふマまマ。兒コ小コ乳ニウ字ジ飲クふ。む。人ヒトの稱ナふマは。親オヤ母モとせセむも違ヒはヒ也ナリ。親オヤ母モを於オ毛モと云イハふ。こと小就コノコトて此コノ稱ナあり。然シカる。を多オホク波ハの古言コノコトと此コノみ心ココロ得エて乳ニウ養ヤウの事コトに於オちチらぬ。処トコロに母モ字ジをオモふ。べベて於オ毛モと訓ツクリはし。非ヒは。れど玉垣タマキ宮ミヤ段ダンに取ツクリ御母オノモとあるも乳ニウ母モ也ナリ。乳ニウ不フ於オ母モの事コトは彼處カノトコロに委ツクリしく云イハはし。垂ツクリ仁ニ天皇テウキヤウ卷マキ乳汁ニウジヤウ。

二字を。知と此みも訓べき小似とれど。知をもせは。出る處此名もて。出る汁此名もを非。然るを其汁をも知と云は。や。後よ畧々依る也。して此の方は。未だ世間小常は萬の傷小母此乳汁を塗て。愈方有る故。此法上代事あるべし。今蛤貝此水字。其如く小塗と云意ある也。故知志流登と訓べし。せは云ふ也。空穂物語俊蔭卷下。紅葉此雪を乳房を嘗扱。在ふ依よ云く。とある登も同じ。方十四よ。信濃あるちまの河此さぐ。ましも君し。そは彼ふみて。多麻等比呂波牟。この等も同。格ある也。そは彼蚌貝の焦粉を。蛤の水以て。せて。母乳汁を塗。如く小塗。志ふ也。して宇牟岐て。ふ名を。母貝の約。して。今か。く。母乳汁此如く塗て。功を。せし。小因て。負依ふ。

ゆ。然るを宇牟岐の貝。して右此二比賣を。直小介蟲を。謂と云。後此重言あり。けり。右此二比賣を。直小介蟲を。謂小を。何ら。尋常の神小天。蚌貝比賣。蚌貝を。伎佐宜集而。蛤貝比賣。蛤貝此水を持。と云。あや。依。我。神名小也。扱。して。其用ひと。依。貝名を。ば。共小畧ける。外也。是るも。一の。ち。多。然。二の。貝を用ひて。功。を。あ。せ。し。小。因。て。其。貝。此。名。残。以て。其。神。名。小。も。稱。し。あ。る。は。し。今。云。此。二。比。賣。の。こ。と。二。比。考。よ。右。の。二。比。賣。也。即。蚌。貝。と。蛤。貝。と。を。云。ふ。也。正。し。云。は。し。て。比。賣。と。云。ふ。也。凡。て。此。例。と。も。為。は。れ。ど。此。を。あ。い。ど。皆。女。比。定。ふ。云。は。し。て。比。賣。と。云。ふ。也。今。の。功。を。美。稱。す。と。神。と。せ。る。名。を。取。扱。然。る。也。第。百。四。段。第。百。五。段。小。記。せ。依。如。く。二。比。賣。共。よ。正。し。き。事。跡。の。案。あり。殊。り。蚌。貝。比。賣。也。直。の。介。蟲。を。思。云。ふ。や。ご。と。外。き。神。を。さ。す。子。も。生。坐。れ。む。直。の。介。蟲。を。思。

於是八十神見出。且欺而率入

をまざれ
ばあり
如くふ愈イヒとる意を帯オビて云ふふ依ヨはし。壯夫ヲトコとは此字の
如ニ少壯シカクサカふ依を云稱ふ依ヨと上上第六
遊ユ行キを阿流ア伎キと訓訓べし。今云下下の矣矣を
流ル久ク爾ニ五五ふ阿蘇ア比阿留ビ伎キ斯ス十八ふ安流ア氣キ騰トウふどあり。
書紀よ歩行の訓訓ままと中古の物語物語文文あどよも阿理久アと
此此み見えぬれむ阿理久アと云ぞ雅言雅言の如く聞聞ゆ終終れど
其其をを加加
予予ゆて
後後あり
り

山而切伏大樹。茄矢打立其木。
令入其中而。即打離其冰目矢。
而拷殺矣。爾亦其御祖命哭乍
求則見得。即拆其木而取出活
而告其子言。汝有此間。則遂爲

ヤソガ三エナムホロボサトノリタマロテスナハチニキノクニ
八十神所滅焉云而乃於木圀

ノオホヤビコノカ三ノ三モトイソガレヤリタマヒキ
出大屋毘古神出御許速遣出

カレヤソガ三マギオヒイタリテヤサストキニ
爾八十神覓追臻而矢刺出時

ヨリキノマタクキノガレテサリタマヒキ
自木俣漏逃而去矣

率入山チテイリあの山イシイトヨ何所の山とも傳えらざゆあす前の同
山ふを非じ。○茹矢ハ。茹字諸本ふ茹と作るを記傳ふ眞

福寺本ふ茹と作るを取て。茹字を食也と注せれぬ。波米
氏と訓ばしゆ有り。此ふ依て。前よは茹矢ハメヤテ而テ文を成し
うぞ。後よ越後信濃陸奥あどの圀人此言を聞くふ。彼圀
此杣人の言ふ。大ある木を掬割るふ。指込む久佐備と云
物此あやを。波米矢と云牙也。是疑なく古言此遺れゆあ
也。故今を本此あふ。茹矢と書て波米夜と訓於。波米は。
師云令食の切ま也。あゆ言よる。伊勢物語の歌ふ。き於ふ
波米あてとある波米あども是あす。凡て物を入あを。
波牟流せ云も。皆本を令食意あり。さて此よ食と書ばし
少し物遠きあ。ちばまど。此を物を食しむる。茂云ふ
とむ。事の異ある故よ。字を換て書るふも有べし。ち

て矢を。あは尋常此矢ふを非。木ふ採入きて割目を
 於く。器具を云。次は水目矢とあり。即其物あり。或人云。今
 口ふ挟みて。搦を矢と。難き。木柯の無き。谷を。其木
 云。常と云へ。是れ。茹とは。木ふ採入る。を云あり。思
 ふ。水字を。羽字の右に。豎の畫に。滅て。誤き。依ふ。て。羽目
 矢ふ。ても。あらむ。り。若然らば。木ふ採茹る。由に。名あり。と
 有。正。然れ。む。茹矢打立其木と訓。後く。思も。依ふ。は。と。信友
 考。ふ。茹矢は。能米夜と訓べし。能米を。令吞の義。よ。て。能麻
 約。正。能。木を。割く。ふ。其木。子。搦こみ。令吞矢。此由。れ。能米
 米あり。て。ふ。語を。和名。抄ふ。細周易。註云。衣細。字亦作。細。和名。所以
 塞。舟。漏也。と。あり。一本。細を。み。糸。細と。色。葉。字。類。抄。ふ。は。

細亦作。細。塞。船。漏。絮也。ノ。三。ノ。一。は。と。細。ノ。マ。ウ。名。義。抄。ふ
 細亦。細。フ。ネ。ノ。メ。ノ。三。也。は。と。運。歩。集。ふ。筋。ノ。マ。玉。篇。よ
 筋。刮。取。竹。皮。爲。筋。ま。と。竹。筋。以。塞。舟。ノ。メ。と。も。あり。正。さ。て。細
 字。今。字。書。ど。も。小。見。當。ら。れ。ど。絮。縑。也。塞。也。或。作。細。と。注。あり
 正。古。は。絮。を。細。と。毛。作。る。を。依。ぶ。し。細。筋。の。二。字。を。今。字。書
 共。よ。所。謂。塞。船。漏。を。云。る。義。を。見。當。ら。れ。ど。字。類。抄。よ。敗。船
 注。云。此。大。編。刮。竹。筋。以。程。漏。処。者。フ。子。ノ。ア。カ。筋。仁。謂。音。陶。景
 と。訓。り。あ。る。メ。を。舟。の。ア。カ。と。云。る。あり。古。は。其。義。ふ
 も。用。と。正。し。故。ふ。上。よ。引。ゑ。る。字。書。共。ふ。さ。依。釋。の。有。あり。正。
 然。れ。む。細。細。筋。筋。此。字。何。も。能。米。轉。じて。は。ノ。三。と。も。ノ。マ
 と。も。云。ふ。用。と。依。あり。正。さ。て。舟。ふ。ノ。メ。と。云。を。舟。漏。水。の。漏

容イラさ依イやうふ。板イタの透スキ間マを塞フぐとて。檜ヒ皮ハダあどさし食ハむ
る。あれをノメノ三ミとも。せ云依イあア也。字ジを竹タケ筍タケノコあアぎをさ
てテ糸イトる。今水器イハ此水ミヅを洩モラさむ料リョウよ鑿アケと依イ穴アナを塞フぐキヤキ杓シヤクを
ノ三ミと云も。其物モノこそ異イあれ。ノ三ミてふ語コトの意イを同トウじ。其
をノ三ミと云。はと樽ツツあどふ。ノ三ミグチグチせ云イ也。其ノ三ミ穴アナを也。垂
也出デ口クチある由ユ也。也。ノ三ミせ云語コトの本ホ此意イ也。何ナニふまれ。
加カとく打ウこむやう此事コトを云イふ也。扱アツハメハメせ云イ也。令シムル食ハ
意イ。水ミヅあど牙ハムハムノメも食セ吞マ此意イ也。大オホ加カと同意トウイ也
れどめ細ホソふ云イはぐ。ノメは令シムル吞マの義イ也。窄スホく深フカく。乃ナと
堅ツル也義イを含ミ。ハメは令シムル食ハにて。廣ヒロく淺アサく。まゑ緩ユルき義イを

含フク也也。試シべし。考カウ匠シヤウ具キの鑿アケもノメ也。木キ牙ハム打ウ徹トウ意イもて稱シヤウ
けと依イる。令シムル吞マ此意イ也。用ヨウ語ゴのノメと云イむ方正フウセイし
也。舟フネのノメをノ三ミともノマとも云イる如カドく。本ホ語ゴは
也。記キふ。茹ニ矢ヤとある茹ニを食ハ也。又飯イハ牛ウシ馬ウマ也。と依イ字ジ注チュウの
有アり依イて。ハメ也訓クニれさる。いゑく物モノ遠トウし。茹ニを筍タケノコ也誤
り。似ニと也。又上ウふ引ヒぬ依イ四種シシユウの字ジ也。糸イト竹タケ衣イも从シひ。如カド加
也字ジの相サウ離リれ也。又餘ヨふも。竹タケ冠クワン也。通トウじて書カキる字ジも依イ
例レイあどふ。思オモひ準スふるに。記キふ。茹ニまと茹ニと作サシ依イめ。共トウふ
同義トウイ也字ジも。古コノメと云イふ用ヨウと依イふも有アる。然シカドれ也
此文コノミヤコ茹ニ矢ヤ打ウ立テ其木キと訓クニる。今イマも木キを割カく。堅ツルき木キ也

て。本布ど太く作りと依。矢と云物を作也。其を搦立て漸
小割ものあ也。其を矢字くは虫とも云ゆ。射て敵の軀小
為食意此詞よて。戦の場ふて。矢をいくは虫と云。まとの
をいくはと云も。同義此詞と通也。シクヒアヒあどもク
ヒアヒふて。あを互よ食此意あり。此外ふもクヒ
てふ語よて。解るげある。グ多し。あを困よ云ふ。然して
木を割く具を古ノメ矢と云る。あ依るし。其を大木よ搦
立てあ也。古き軍記ふ。矢を深く射込とる。あと。残羽ぶく
らを飲て立あ也。とやうよ云依も。羽の半まで令吞て。射
立あ依を云依文。あ依字も。思ひ合虫はし。せ云牙也。見む
人擇びて採はし。○令入其中と也。師云。大名年遅命を。其
木此割のけある間よ入をむる也也。ちて其木の割目は
あぐいさくう此廣

さあるはきふ。其中小人を入れむ事也。いかゞと。○打離
云疑。あ依べし。此事也。次ある鼠の段ふ論ふべし。○打離
氷目。矢也。比米乃矢乎。宇知離知氏と訓はし。師云。氷目と
は。字は借字ふて。木也。此割目をいふ。極目此意あらむ
の。俗言よ。比米和流く。比和流く。比毘和流く。あど云。比毘
も。比米の訛あるべし。和名抄ふ。瘰。比美俗よ。む比毘と
云。是も比米也。依るし。あ。と。万葉十六。比米加夫良。ハ多
婆左弥。穴待。跡云く。と。有。む。狩。み。用。と。り。と。見。あ。れ。ハ。此。の
氷目。矢と。尤。固。よ。ゆ。別。あ。ま。ど。も。比。米。せ。云。名。の。意。を。同。じ
うるべし。ハ。目。鳴。鏑。と。云。は。鏢。ふ。孔。の。い。く。ち。も。有。を。云。牙
む。比。米。鏑。も。其。孔。を。長。く。樋。よ。彫。る。を。云。あ。る。は。氷。扱。氷
ま。バ。あ。り。今。云。間。字。ヒ。と。云。も。本。を。同。意。也。依。べ。し。扱。氷
目。矢をうち離と也。其ヒメふ打立と依。茄矢を打離ちて
せ云る也也。○拷殺矣とは。かの木此割目ふ挾置とる矢
を打離ち去依と死ふ。其割目忽ふ迫也合也。其中ふ

挾イサまれて死給ひし事也。○見得ハ。師云美延ミエテ氏と訓べし。
得エを。見ルことを得てと云意ハ非オモト求モトめて得エぬ依ヨ意イ事
也。今云本小を得見ミやあるを此師説
也。よとりて目易く見得と書キるあり。○拆サキ其木キは此切キ伏セ
と依大樹の割目小挾イサまき死シて坐を見ミおけと依故小其
木を拆割サキて。屍シタを取リ出し給ふ事也。○取ト出イデを割目とシ出
去イれ也。○活イカ師云此度タビも前の如く。令ス活イカ方術ワありとシむを。
其を傳ハざシし依ヨる也。○其子コとは大名牟遲神を申シは。
○此間を許くと訓べし。○爲八十神。師云爲字をニ爲ニ邇ニ
也訓シはし。かくの如き為字を多米尔○木キ圀カ之大屋毘古
神也。五十猛神イソモウ也。此神カ木キ圀カ坐イ依ヨ由ヨを既イ注イす也。

第六十七段
の傳見ミべし。理リをもて思シふ。此神の本體ムダネ也。須佐之男神
小屬ツキて。必豫美ヒ往坐して有アれば。今木キ圀カ坐イ依ヨを。
世ヨ幸シひ給ふ御靈ミタマを。往昔ソノカミ坐イ處トコロ留ト給へ依ヨ神カミ小ミぞ
坐イ依ヨ給シ。然シカまど其御功德ミタマを同ナじとシれ也。○速遣之也。
伊曾賀志夜理賜イソガシヤリタマヒ伎キ也訓シべし。師云速字此處ココスニヤカ
ろし遣ツもツカハスと。けテ大名牟遲神を。五十猛神の御
訓シてをシろき也。○けテ大名牟遲神を。五十猛神の御
許シふしも令シ遁ノケ遣ヤリぬる所以ユ也。此神ハ須佐之男大神也。
荒魂神アラミタマ也。其御子とは申せども。案マコト天照大御神と須
佐之男神也。荒御魂八十枉津日神ヤスヒ坐イまし。亦ナ其本を
申せむ。伊邪那岐大神の世也。禍事枉物を憎ニク惡ミヤひ給ふ御

靈ふ因て。生坐る神ふ坐りて。其神性の伊猛く剛く御坐りまると。上見と依が如く。其御靈を幸すし。猛き心を振起させて。八十神ふ勝せ奉らむと。此御心ふや。然るは。大名牟遲神あ。の程までを。和御魂のみ勝れ。て。餘正ふ云がひ。八神此爲るが。辛苦免ら。少くも荒御魂此進。御祖命此口惜く思食せる故形。然有む。此神の御態を。熟く見奉。荒魂和魂とく備ハ。見え給ふ。魂和魂と。神ふも人ふも備ハ。得有まじく。此始。如きこと。神道を学ばむ。○覓追。跡を尋。追行。人。熟思ふ。き。○

○臻を師云追及。俗小意あり。此大屋毘古神此御許まで。は至ら。中途。追及し。○矢刺之時。矢刺と云る。白檮原宮段。由氣矢刺。而追入。と有。を始。多く見。明宮段。朝倉宮段。古言ある。此射。む。矢を弓。懸るを云。後世の軍記。とも。○自木。侯漏。而。去。矣。師云。大樹。此下。隱居。其木の。侯。よ。脱。出。て。竊。遁。去。給。ふ。木。侯。字。鏡。江。南。謂。樹。岐。爲。杈。榎。木。乃。万。太。と。何。和名抄。は。杈。榎。を。漏。此。事。は。下。ふ。い。ふ。第九十段。の。去。字。は。佐。理。賜。伎。を。訓。伊。迹。と。訓。て。宜。傳。見。る。此。差。を。古。此。言。よ。く。練。て。知。る。は。し。

爾大屋毘古神議曰。可參向須コ、ニオホヤビコノカミハカリタミツラクテヨマ平デス
 佐出男命所坐出根堅洲国。必サノヲノミコトノマシマスネノカタスクニニカナズ
 其大神將議焉。詔矣。故隨御命ソノオホカミナムタバカリタマヒトノリタマヒキカレニミマミコトノ
 而參到須佐出男命出御所則ニマ平タリスサノヲノミコトノミモトニシカバ
 其御女須勢理毘賣命出見而ソノミムスメスセリビメノミコトイデミテ

爲目合相婚坐而還入告其御シテマダハロミアヒマシテカヘリイリテニソノミ
 父甚麗神參來坐焉。白矣。爾其チ、イトウルハシキカミマ平キマシツトマラシタマヒキカレソノ
 大神出見而。此者葦原醜男云オホカミイデミテコハアレハラシコヲトイフ
 神也。告而。即喚入而。令寢其蛇カミゾトノリタマヒテスナハチヨビイレテシメタマヒネソノヘミノ
 室屋矣。於是其妻須勢理毘賣ムロヤニキコ、ニソノミメスセリビメノ

命。以蛇比禮授其夫而告云。其
蛇將咋則以此比禮三舉而可
打撥告出。故如教爲出則蛇自
靜出故。平寢而出矣。亦來日夜
者。入吳公與蜂室屋然。且授吳

公蜂出比禮而如先教出故。平
而出矣。

爾大屋毘古神議曰。おの八字を篤胤が謹て補へる也。
其由を徴を。けて此御言此前ふ。大名牟遲神の八十神小
苦免られ賜ふ由を。白し給へる事此有べき小。其事れま
は。前後の文よ譲りて省け依あむべし。○須佐之男命所
坐之根之堅洲国を稱ふおと上よ云也。第
十段の傳。けて此大神は。豫母都国小就坐せ依こと。既ふ

上ふ出た。今は既に彼圀の大神とありて坐くせる也。
第七十九段の傳見べし。○可參向師云參向二字。記中ふ往くあはれ何
まめ參向奉とまろふ云也。然れども此も其意ふ非也。と
ど參也。参赴二字も多く参迎奉る也。用ひて麻章禮
をも訓はるまど。此を承麻章傳氏余と訓はし。師寺佛
足石御哥。此御跡字尋ね求て與伎人の在也。圀よは
我も麻胃氏年とあり。今此も此世を離るる圀を往を云
るが似也。○將議焉。多婆訶理賜比那牟と訓べし。多
は唯ハル。此は八十神の難を免れて。功德を立給ふべき
事を宜さはふ度也。賜むと云也。塩推神の秋遠理命。其
む者ぞと教奉也。抑豫見都圀をも。伊邪那岐大神の往
と全同じ意也。

昔御行坐して其醜免き穢死有状を御覽して逃返すは
し。彼圀此圀の往來を留むと投給へ依御杖引塞ませる
千引石よ。三柱に塞神とち生坐て其塚をし守り給ふば。
現圀とゆは都て往來あるはじき謂あるよ。前ふ須佐之
男命に往坐るを元とゆ御母ふ屬て。彼圀に大神と爲給
ふべき理の有れば。此を今云ふ限也。非ぬを。今大名牟
遲神に往坐る事は。須佐之男命に屬て。彼圀に坐は八十
枉津日神に。現世を幸へ給ふと。留給ふ依御靈神の御議
よて。大名牟遲神の身ふ負る災難をむ。悉く彼圀に拂ひ
捨し。須佐之男大神に御稜威を承賜らせ給はむと也。

御議ミカガリとぞ所思奉らゆ。然るに此神亦名を瀬織津姫神
 とも申て。彼伊邪那岐大神の禍事マガコトケガレ汚穢を惡キラひ給ふ御魂
 此疑天ウタリ生坐る謂イハレふ依ヨて。乃ナ此禍事枉物罪穢を豫母都因
 子ミ祓ハラひ遣マり給ふ功德ミイサヲを思オモひ合アせて知チらゆ。此此趣ク委ク
尤七段第五十九段のサテ傳ツトふ註ツせるを見ミべし。偕サテふそ其議ミカガリふ頼タて。八十神の難ツギヒを
 免メむ。大亦依オホサ利タカサを得エて。遂ツふ功績ツネニを立タ給タす。凶難キハ至マ極ヘリて。
 今は吉ヨキふ趣オモカむとハなる。凶アキと吉ヨキと此交際キハ。豫母都因ヨモツに遣
 給ふ事コトの。とく枉津日ヤミヒ神の徳イサヲふ應カへるを熟ツラく思オモふハし。
 ○參到サンタウ則スレバ也。師云シヘク麻章マサ多理志タリシ加婆カバと訓ツばし。到の伊を省
も佛足石御哥ふ。麻章多利氏麻佐米尔弥祢牟。○其御女
とあるふ依まり。參到て正目よ見らむなり。

須勢理毘賣命スセリヒメノミコト御名義ミナガタを師説シヘクふ。下シタある火須勢理命ヒスセリノミコトと同
 く。進スむ意イを也。彼命カノミコトの名義ナガタを進スむ意イとハなる説ツふ。其コノ今
第百四十八段の傳を見て知べし。此此比賣神ヒメノミコトの方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
此。次より引る。此と同類の木花之佐久夜比賣。また海比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
神此女おどを。父此嫁を待給へる。此比賣を比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
もあらば。心を相婚。や有也。偕ふ此比賣命を。天照大御神比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
せるも。進免依れ也。比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
也。高天原ふて御誓坐る時ふ生坐る。三女神此。一柱と坐比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
まは神あると。上よ委く注也。第六十四段の傳見る比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
を。速佐須良比賣神也。一神ある由比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
言れとるを。甚く達へる説なり。比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
を須佐之男命の物ありしと。大御神の吹生坐る神あ比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある
ゆ。大御神を此物實を尋給ひて。須佐之男命ふ屬給す比ヒ賣メ神ノミコトのハ方カタをハ進スみて。夫ツ婚ムスむハ故ユ此御名コノミナある

依ぐ。共小豫美、因ふ入坐て。今かく大名年遅、神ふ相婚は
して。其嫡妻とお正給ひ。後と正補へて。功し死神と爲給
る依事を幽き契ある事あるはし。○爲目合を。師云麻具
波比志氏と訓はし。具波比を。即物の合こせれる由。上ふ
委曲ふ云依ぐ如ふれむ。然訓て。目を見交は事なり。麻具
のあと、第六段の傳ふ。ちて男女故ふ目を交はは。互ふ思
委く注せるを見む。ひのふ態ふまむ。即交通事よも轉し云ふ。然れど此は。
次よ相婚とあるぞ。其事ふまむ。目合は。あづ本の意なり。
海神宮段ふ。豐玉毘賣命。思奇出見乃見感目合。白其父曰
云く。即令婚其女。豐玉毘賣とあるも。令婚が交通ふまむば。

上此目合を。交ふ目見交ことれ依ふを著ふまむ。此も準
子て知はし。書紀よむあづ。挙目視之。まよ仰見あど有ま
この事と思ふ人も有む。ちよ非互互よ心有思合て
見交あり。見感とあるふてめ知べく。まよ次お引く迹く
藝命の御言を。はと邇く藝命の詔ふ。吾欲目合汝と。木花
之。佐久夜毘賣ふ詔子依を。交通こせよ轉言方なり。か此
美斗能麻具波比とあるふ同心。○相婚を。あづは美阿比
を訓べし。美を御。○葦原醜男師説ふ。延佳本あどおは。命
字あまども。此は舊印本ふ無ぞよ死。下ふ是奴を詔子依
御言。まよ此時の凡て此接待あぞを思ふよ。命を詔ふ
はじれむ。れむ。ちよ此御名を。此とゆ後ふ負給子る御
名あるべきを。此よ今詔ふむ。例の後を

もて。前牙も同じて語りや有也。火遠理命の海神宮に往
傳子とる語あるべし。坐る段に。爾海神自出見而此人者。天津日高之御子。虚空
津日高也云而。即奉率入内云。と有。相類と也。○其蛇
室屋師云加茂翁也。其字ハ無てあるは。と言れし。うど
も。此在^{ソノ}其處之^{トコロ}と處を云る意ありて。須佐之男命の坐宮に
邊ある事を。斷れる辭あるを。必有^{コト}依ぞと死。蛇を此は吳
公蜂おぞく。類子て云依を思ふ。小蛇あるを。なまむ。弊
美と訓は。遠呂智とを。最大^{オホキ}依を云べ。れバ。此を然
し。和名抄に。蛇和名倍美。一云。久知奈波。日本。蛇加良
須倍美。蚺蛇仁之本倍美とありて。弊美てふ名ぞ主と聞

也。但し弊美と云。反鼻の字音より出とる。疑
反鼻。其音片尾と云。右より引る和名倍美とを。似とれ
ども。別あり。御圍も無也。反鼻も。とゆ。正名も非也。そま
め。上代此御圍も無也。物は漢一名。あどをも取て。名く
る。例こま。有ま。蛇あど。神代より有る物。あま
を。名も無加る。べき。非也。も。半呂知を。古名とせむ。よ
も。既。よ。上。弊美と云。名は。廣く。云。あ。は。し。と。る。さ。は。み。聞
あ。し。其。上。弊美と云。名は。廣く。云。あ。は。し。と。る。さ。は。み。聞
也。る。を。や。然。ま。む。此。を。反。鼻。の。音。と。自。然。似。多。依。の。み。あ。り
け。万。葉。も。倍。美。と。云。辭。小。蛇。を。借。て。書。る。處。あ。り。○。今。云。
倍。美。美。豆。知。あ。ぞ。の。美。こ。れ。同。じ。あ。せ。よ。て。龍。蛇。此。類。の。總
名。あり。十二。支。此。巴。を。美。と。訓。る。お。て。知。は。し。さ。て。倍。美。を
辺。美。於。迦。美。を。奧。美。う。奧。所。美。り。て。奥。と。辺。と。を。對。へ。ち。て
と。る。名。あ。依。由。は。既。よ。委。く。第。十。六。段。の。傳。よ。云。子。也。ち。て
小。蛇。と。依。る。ふ。付。て。思。子。ば。蝮。蛇。あ。ら。む。其。故。を。類。へ。多
云。依。吳。公。め。蜂。も。共。よ。螫。物。あ。ま。む。是。も。然。る。は。ま。ば。あ

尋常の蛇をけり此み害をあぢぬ物おれむ此も蝮蛇よ
てとく叶ふべきや。咋とを蝮を云牙りとててめ妨お
くや。けりて其も蛇の一種おまば。古は共おまば蛇とも
云おる。和名抄よは蝮を和名波美とあて。今云眞虫お
を眞神と云が如し。但し尋けりてかく蛇室次よ。吳公蜂室
常の蛇や見ても有ぬべし。如何ある故おる。若は根固おまむ。人け
あぢて有るを。如何ある故おる。若は根固おまむ。人け
害をけら。かゝゆ物此類凡て多加るよや。下文お見其頭
者。吳公多在とあるれどを以て。其處の狀を思ふは。其
が中おも。蛇室を云。殊よ蛇此多加ゆ室字云あるべし。
○令寢ハ。師云泥志米賜伎と訓べし。今人此詞おるひよ
と訓べきが如くおまむ。其を雅とらて見まむ。泥佐志米
乃和礼尔依志米之とあり。令得しあり。得と寢を全同格

の詞おるひよ。得む寢む得る寢ゆれむ。第三第四の
音よて活用め。まよ万葉十四東哥よ。伊射祢志米刀羅と
云こと有る。令。○其妻師云。既よ一度相婚坐おる故よ。を
や妻と云。次よ其夫ともあり。○蛇比禮師云。饒速日命。
天よ降給ふ時。天神の授賜へゆ瑞寶十種の中よも。
蛇比禮一。蜂比禮一品物比禮一と有る。其を用ふ道を教
給ふ御言ふ。布瑠部由良由良止布瑠部と有る。あは事委
皇卷よ。此を蛇の身比禮と云ふ。非は蛇を撥ふ比禮お
見ゆ。譬へば蛇之鹿正あぢ云。劔名あどめ蛇が劔よ。何ら
右の十種中よ。品物比禮一と有る。凡て物の名お此例多し。
ことを知べし。種く物身の鱗あらむ。一よを非は字や。
天之日示。此持渡來し寶物此中よ。振浪比禮。切浪比禮お

ど何る比禮ふ同じ。儲そ此比禮てふ物也。如何ある物ぞ
や云ふよ。は抄比禮也。振手の約也。と依名ふて。何よま
れ打振物を云。理氏を礼と切れぬ。布礼あまど。ま布理
は比と切せぬ。おれおら比禮を云る。
あけまを魚比鱈も。水中字行とて振物服の領巾も。本を
振む料ふて。皆本は。一意ふ名とる物ぞ。故よ上代よ。領巾
然れぬ蛇比禮也。蛇を撥ふとて。振物比名あ也。然る
の由く良く止布瑠部と何る詞よ就て。玉ありぬと云説
を叶えぬ。由良由良を振さまを云。詞布瑠閉を。即振まを
延とるこ。○其夫は。師云曾能比古遅と訓はし。夫を比古
とばあり。遅と云るあと。下よ見也。彼處よ云はし。第九十九段
の傳見べし。は
遠もも訓はし。即此比賣神の御歌ふ。那遠伎氏遠波那

志と何也。汝を除去て夫。和名抄ふ。夫和名乎。宇止。宇止を人
乎都登といふ。一云乎止古。まその後夫和名宇波乎。前夫和
は此訛あり。○其夫は。師云曾能比古遅と訓はし。夫を比古
名之。太乎と見也。是らみお衰を本也。と依名あ也。○三
舉也。師云美多毘布理氏と訓べし。布理を布伎と。舉也。必
布理と訓はし。由は。右ふ云るが如し。白檮原宮段の始ふ。
爲釣乍。打羽舉來人。と何依舉字も。必然訓べき例を以て。
思ひ定むはし。れ不彼処よ云を。○如教爲之則師云此上
果して蛇の咋むとせし事有べきを。其在上此語よ讓
て。省ける文あ也。此例常多し。餘も。○自靜とは。師云起
立て咋むとせし蛇の。退き靜て何でふ害をも爲さ也

しぬ也。○平寢也。師云夜須久泥氏と訓考し。平也。常也。多
夜須久は安と書ども。此二言を常と連言て。比良と訓み
同意あり。此を必夜須久と訓べき語あり。○出矣ハ翌
朝蛇室を也出給ふ也。○來日は師云久流比と訓べし。書
紀ふ。明日明且明年れぞゆる訓を見るふ。明字ある哉阿
久流と訓まで。久流と訓る也。是古言れ依べし。但し助辞
得交。此助辞を置べき言ふは非也。當時此はう也。れ
事を誰もとく辨るるべきをいりある事ふ。久流
比は翌日を云。○吳公は師云蜈蚣也。但し延佳本よ。蜈
しら子改あるものあり。字鏡蛆字の下ふも。吳公也作也。
諸本みお吳公とあり。如此偏を省死て書也。此方ふて。古此一書法あり。例をい
はふ。健字建と書き。建字ふ多氣と訓假字ふ。伎を支と作

死。支字よ。只字を判の假字よ。書るも。枳字也。弦字玄也
作き。石村此村を寸也作き。此事池辺宮段醜字鬼也加死。
和名抄上野国此郷名ふ委文。利之土と何ゆも。倭字此偏を
省る也。はと後世よ。條を条とかくめ此例あり。此らの
古來物知人との心得り。秘とる事あるを。己近。ちて和
ごろ考得て。右此例を以て見まむ。皆いと明らし。ちて和
名抄ふ。蜈蚣和名無加天と何也。○蜂和名抄ふ。波知と何
也。○吳公蜂之比禮。おを吳公を撥ふと。蜂を撥ふ也。二の
比禮う。はと此二虫を撥ふ比禮よて一。何ふても有あ
む。今云十種瑞宝の中よ。品物比禮一とも有まむ。ちて世
人の害をぬれ物也。種く多かる中ふ。此二虫をちめ云る

由^ユは上^ツ代^ノ民^ノの家居^イあど^ハは^ウく^ク有^カて野山^ノふ交^ヒせ
 住^スし^ホど^トを^コレ^ラ此^ノ等^ノ此^ノ物^ノの害^ヲぞ多^ク加^フせ^キむ^シ然^ラれ^ドも^トあ^ソ大
 祓^ハ詞^ヲも^ハ昆^ハ虫^ハ此^ノ災^ヲを^ト舉^ゲて^シ十^種寶^ノの中^ニも^ト此^ノ等^ヲを^ト撥^ク
 比^ヒ禮^ヲを^ト有^ルあ^ソせ^ルま^シ。欽^メ天^皇紀^ノよ^シ席^際現^ル。○平^ニ而^シ出^ス矣^ト此
 は^ネ寢^ヲを^トば^シ上^ノふ^ナ倣^ヲ
 せて^ハ畧^スる^ル文^ヲ取^リ也^ト。

於^コ、是^ニ其^ノ大^ニ神^ヲ以^テ鳴^キ鏑^ヲ射^シ入^リ大^ニ野^ニ
 出^シ中^ニ而^シ令^シ採^ル其^ノ矢^ヲ矣^ト故^ニ入^リ其^ノ野^ニ
ノナカニテシメタヒトランソノヤヲキカレイリマスソノヌニ

時^ト即^チ以^テ火^ヲ燒^ク廻^リ其^ノ野^ニ焉^ト爾^レ不^レ知^ル
トキニスナハチモテヒヲヤキメグラレソノヌヲツコ、ニザルレラ

所^ト出^シ出^シ間^ニ鼠^ハ來^リ云^フ出^シ内^ニ者^ハ富^ニ
トコロイデムアヒダニネズミキテイロケルハウチハホラ

良^ホニ外^ト者^ハ須^スニ夫^トニ如^シ此^ノ言^ハ故^ニ
ホラトハスブスブカクイフユエニ

踏^フ其^ノ處^ニ則^チ落^ク入^リ隱^ニ出^シ間^ニ火^ヲ者^ハ燒^ク
フミレソコヲカバオチイリカクリシアヒダニヒハヤケ

過^ス焉^ト爾^レ其^ノ鼠^ヲ咋^リ持^リ其^ノ鳴^キ鏑^ヲ出^シ來^リ
スギヌコ、ニソノネズミクヒモチカノナリカブラライデキ

テタテツリキソノヤノハハソノネズミノコドモ三ナ
而奉出其矢羽者其鼠子等皆

クロタリキ
喫矣。

鳴鏑師云書紀の訓ふ那流訶夫良と何まども字鏡ふ鏑
奈利加夫良とあるよ依て訓べし名義を鳴神夫理矢あ
也。神の微を畧き理夜を良と切、係。○今云此師説もさる
言あぐら此をカブラはカプロと同言ふて則神と同
義なり然まバ鳴神矢と云意あるはしさてカプロ
とカ三と同言ある由を第一段よ注るを見るべし。天智
天皇紀ふ有細響如鳴鏑とあは如く射れむ空を鳴行ぐ。
雷よ似とまむあ也。蔓青根の形ふ似と係故の名と云む
非説ありそを返りて此鏑よ似とる

のら彼根をも加夫良とハ云あり。○今云あの論をい
おそとあり先後む云はらび鏑も蔓青根もとめよ
末れり其本を第ちて此矢下おも往く見えぬ也。古もは
一段よ云ぐ如し。書紀ふ八日鳴鏑と云も有ぬ。八日
ら用ひし物と見也。書紀ふ八日鳴鏑と云も有ぬ。八日
ふ。竅のいくち和名抄よ日本紀私記云八日鏑夜豆女加
も有を云ふ。雷を多神ともいふ。鳴鏑をも加夫良と
布良と何也。此みも云へし。はとは後よ。鳴鏑を分て加夫
良也。此も云う。加夫良をめとふて其中よ。鳴を分て。鳴
鏑と云よ。非し。○今云カブラを本大く末細き物を
云名あまバカブラを本よてナリカブ万葉九ふ響矢と
ラを末あるあの上よ云と合せ辨。登し。加夫良と
もを免也。此響矢を今本の訓よ。加夫良と
只あはて此鏑のあやよて分て加夫良を訓はき義を見
え。此を漢籍ふ鳴鏑と云物。此方の那理加夫良ふ似と

依故ふ。此字を當と依ふまむ。鏑一字を訓るも。鳴鏑とゆ
移ま依あり。史記匈奴傳云。冒頓乃作為鳴鏑。と見え。○燒
廻焉。夜伎米具良志都と訓べし。○不知所出。師云不
知可出之處と云意おれむ。此所字は虚字お非びけり。此
意を四方と云燒廻去故。遁出べき方お死れ。抑蛇を
云ひ吳公蜂と云此事と云ひ。種くよ苦惱免賜ふ所以を。
彼八十神の如く。冥お害をむの御心は非去。如此爲て。
此神此勇怯ま。智愚あるを驗給をむとあるは。次文
ふ御心は愛く思して御寢ませ。せ。有ふて其意著れと
也。ま。と。此。く。さ。く。の。難。苦。も。お。○鼠。和。名。抄。よ。鼠。和。名。禰
の。お。ら。祓。除。此。意。ある。を。や。

須美と何也。小竹真槲云々。根。困。住。れ。む。あり。今。現。よ。ある。
鼠も坑よ住み夜ふ出るを。此物めと夜見。困と。○内者富
り來れる物あらむと云。然も有べく也。○富良く。師云。富良を物の中此空虚ふして。廣きを云ふ。洞
富良く。師云。富良を物の中此空虚ふして。廣きを云ふ。洞
あぞ是あ也。そは廓を約免と依言あ也。凡て物の殼ばう
く。空虚れるを俗よ富賀良と云。此意あり。は。朝。富。良
気と。富。賀。良。富。賀。良。と。明。行。を。云。と。全。く。同。意。ある。を。以
て。も。富。良。と。富。賀。良。○外者須く夫。師云。須夫を窄死れ
と。洞。き。を。知。る。は。し。○外者須く夫。師云。須夫を窄死れ
也。統るも本を廣ごり。この多。煩。を。須。夫。と。通。を。し。云。例
り。ち。て。内。と。は。鼠。の。地。中。お。構。牙。と。依。穴。の。奥。を。い。ひ。外。也
は。其。穴。の。入。口。を。云。あ。也。外。を。登。と。訓。を。し。曾。登。と。云。を。俗
心。得。と。る。を。り。混。し。れ。る。は。背。面。を。云。を。成。務。天
皇。紀。お。見。え。て。背。津。於。母。を。約。と。る。あり。外。面。の。意。よ。何。ら

於中昔と巴哥あどもも外面の意然れむ如此云予る意
よむむを叶をば外を多登あり
は己が地中ふ構予と依穴此奥を廓し廣し入口を窄狭
れむ火の焼入げき由あり故暫これ穴内ふ隠坐て難
を免ま給予とあ巴のさて富良も須夫も重祓て云るを鼠
人谷垣守が説よ土佐囹方言遭遇不凶幸事有保良奈留
古登迹阿布之言或不虞災厄亦通用此言者以出於望
外之類轉用耳或鼠之故事有吉凶二途以故假用乎此方
言蓋傳上世之諺雖細事堪愛賞焉とい予りさる説あり云
○落入隱を淤知伊理加久理と訓べし隱を加久理と云
師云自彼鼠穴中予落入て御身の隱給予るあり斯て其
間ふ彼野火を穴外を燒過去て其難を免給ひ也今云此
師説よ自木俣漏進と云今此鼠穴に入りて隱給ふと云
るを合せて思予む此神も少彦名命の如く身軀の甚小

く坐るるよやされど此を毎しつ小物も見えとる事無
れだ定て云云とし書紀よ少彦名命のこを大己貴
神即取置掌中而翫之とあるを思予む同じふと小己貴
神とも見えと云ま於れど此説は無て有まふし然る
を木俣よむ人の入りむり大あるをいくらも有巴○乍
はと鼠穴も人此入ばか巴外依ぬあどう無らむ
持万葉十六ふ池神の力士儂の毛白鷺乃梓乍持て飛渡
らむ○奉之をえ大名牟遲神も獻るあり師云抑鼠を人
此害をれ虫物の家内ふ在を吉とし無を凶と依るは此
故事をゆぞ出と巴むまと近く焼ぬべき家をか祓て
○其矢羽者云く皆喫矣師説よ皆を子等皆れり喫を上
を共み助けて乍予持來るあり鏃の方を重々も大鼠
の持ち羽の方を輕るれむ子鼠此扶持むこと然も傷
ふ事ぞあ思ひまが予そと言れ於まど何不見ても喫傷

予の事とをり其羽を子鼠の皆喫とる事までは記し傳外よを見えび。其羽を子鼠の皆喫とる事までは記し傳。ばとも有ばき物あるふ。如此しも傳と依を羽をみふ喫。あてしうた二度其矢を用ふること能えげしと云意。ふや。若くは大神の再射て大名牟遲神を再苦免給。はむ事を思ひて羽を喫とりの意よても有べし。

於是其御妻須勢理毘賣命者。

持喪具而哭來其父大神者思

已歿訖而出立其野則爾持其

矢而奉出時率入家而喚入八

田間大室屋而令取其御頭出

虱矣故見其御頭則吳公多在

爾其妻取牟久木冢與赤土授

其夫故咋破其木冢含赤土而

唾出出則其大神以爲咋破吳

公唾出而於御心愛思而御寢

坐矣。

喪具也。師云加茂翁の波夫理都毛能と訓れ多るふ依る
也。書紀に祓具を此云波羅間
都母能とあると同格あり。喪ハ母と訓べき字あり
ども此を葬せむ料此具あるは乃也。母能曾那
ふを非と訓れ其心あり。其故をまば凡て具字漢籍に
て。躰と用をよ用ふ多とすむ礼記檀弓に喪具君子恥具

と云る上の具を其料ふ備る物を云て躰下の具をそ此
物を備るを云て用あり。然依り此方よて用言よ曾那
布と云る古言れまども其物を指て曾那閉と躰ふ云む
を具字よ依とる後此言めきて聞ゆれむあり。さまど然
訓までを訓の多き所もあまむ。其を己こと得。○哭來を
也。然も訓あべし。あを他よも此例い多り也。○哭來を
師言よ。那伎都く來坐志と訓べし。加茂大人の書入ふ。此
は影媛が。鮪臣を葬し時の歌と合せて見ると何也。信よ
とく似多と有也。其は武烈天皇紀に眞鳥大臣れ子。鮪
臣れ奸する。影媛と云るが。鮪臣の戮されとる處よ行て。
悲み歌ひる。其歌詞の中。按摩該彌播伊比佐倍母理。
按摩暮比彌彌逗佐倍母理。難岐曾衰遲喻俱謀柯導比謎。
阿婆例と見え遂ふ其尸骸を收埋と依事何也。此玉笥ふ

飯を盛^イ玉^{タマ}盃^{モヒ}よ水を盛^ルとある。即^チ喪具の中^ニあり。此^レを彼^レく記^スせま^バ其^ノ大^凡を此^ノ注^ヲするあり。○思^ハ已^ニ死^シ訖^スを須^ス傳^フ爾^ニ麻^マ賀^ガ理^リ奴^ヌ登^ト思^ハ本^ホ志^シ氏^テと訓^ベし。抑^ク此^ノ語^ヲ右^ノ須^ス勢^セ理^リ毘^ヒ賣^メ命^メ者^トと云^フ下^ニふ。先^ツ有^ルべきを彼^レ處^ニふは言^フて後^クれ^テ此^ノ處^ニふしも云^フるは師^ノ云^フ。古^ノ文^ノの巧^クみ^ヲあ^リ。上^ノよを持^チ喪^具云^フと云^フ語^ハあ^まむ。自^ラ死^シ訖^スと思^フせる事^ハ聞^クえ。ま^ま此^ノ處^ニふを然^ラる語^モ無^クて直^ニふ出^立其^ノ野^ニと云^フむ。語^ノ調^モ足^ラハ^ズば。彼^レ此^レを以^テ。此^ノ處^ニふ此^ノ語^ヲをば置^テ。自^ラ然^ニふ彼^レ處^ニへもひ^ゞうせと依^テ物^トぞ。○出^立其^ノ野^ニ則^チ師^ノ云^フ。ふは此^ノ段^ノの凡^テ此^ノ意^ヲを以^テ多^ク思^フふ。は^は右^ニ此^ノ如^ク。大^ノ名^ノ牟^遅神^ヲを種^々苦^シ久^ク賜^フふ。前^ニふ

云^フ如^ク。皆^レ此^ノ神^ヲを驗^ミ賜^フふ。依^テふ。今^カく野^ノ火^ノ熾^カふ燃^ス私^ニ多^ク。既^ニ燒^ケ竟^スまで。ふ^は彼^ノ神^ノの出^立坐^シ燃^ス故^ニ。如^ク此^ノは既^ニ燒^ケて死^シ燃^スる物^トれらむと。御^ノ心^ハ此^ノ内^ニふ。い^ゞむ^はしく。心^モと^もあ^く思^フして。其^ノ爲^ニ終^ヲを尋^ニ給^フはむとぞ。出^立賜^ヒ於^テらむ。出^立を推^テ古^ノ天^皇紀^ノの哥^ノふ。異^ニ泥^ニ。○持^チ其^ノ矢^ヲ而^テ奉^ル之^ハ。始^メふ令^レ採^ル其^ノ矢^ヲと。何^レ依^テ事^ノ字^ノ竟^ハふ。○率^テ入^ル家^ニ而^テ云^フ。師^ノ云^フ。此^ノを己^ニ死^シ燃^スを思^フし。とるを。思^フひの外^ニ。彼^ノ矢^ヲを持^チて出^立坐^シる。あ^まむ。驚^キ賜^ヒて云^フ。あ^まむと云^フ。此^ノ上^ニふ必^ズ有^ル燃^スべき處^ニある。何^レとも依^テ言^フ。此^ノ無^クて。語^ノの足^ヲをぬ^ク心^ヲち^ゞるは裏^ノの御^ノ心^ヲを顯^シ賜^フを強^ク面^ヲお^とす

賜ふ故あり。其由を次家を即須佐之男大神の御家あり。

○八田間大室屋師云八田間を廣く大なる謂ふ也。田借字

此意を未思得也。若は都の轉れるる也。八箇間加茂大

八を例はる多死を云ふ也。間

を云凡て家此柱と柱との中間を云也。中昔までも然也。

一、二間、三間、東より第一、西より第三、間あど云る

を間と云も、右の意を轉るる也。ま、ちて此大室を

次、文ふを依ふ。此大神此内寢と見也。○虱和名抄、

云、蟻虱子也。和名木虱齧入蟲也。和名之良美とあり。字鏡よ。蟻

蟻蝨和名抄、志良彌と見え。蟻字の下ふ。志良彌。又支加

佐とあり。之良美と云、義を白虫あり。牟志の切也。美と

榮也。指貫陰陽師上東門院の御座此とき、淺ましげある

表の指貫平鞋をきて、鬢も、で中門を出入て、階隱

と鏡あり。白虫を一字。○吳公多在上の豫見、固段ふ。

伊邪那美命の御有状を。宇士多加禮斗呂岐而云くと

有と合せて。彼固此状を思ふはし。師云、か、依御頭ふ。手

を觸さるるも。猶此神を試みるふあり。○牟久木實を。天

武天皇紀ふ。椹此云武矩と見え。本草和名ふ。椹子木一名、

椹和名牟久乃岐とあり。字鏡ふ。材椹杖を牟久乃

木とあり。ま、積和ま、杣。○赤土は。万葉はと其餘の書

ふめ。波邇と訓べき例多加まども此を必阿加邇と訓は
し。まも曾富迹也。然るは。吳公を嚙碎とる色ふ似せむ料
も訓べきあり。○授其夫前子蛇の比禮を授
けて教とる如くふ。此ふめ云くし賜牙と教給ふ言何る
はきを上よ倣せせて省るも此あり。○木實を師云許能
美と訓べし。上あ依を年久とあけける故ふ木実。和名抄
よ。應劭曰。木実曰菓。日本紀私記云古乃美。俗云久也何也。
○昨破を師云久比夜夫理と訓むはし。嚙碎を云あり。下
あるも同じ。万葉十六よ。机の島此小螺を伊拾ひ持來て
○含は。師云布々美氏と訓べし。布久牟此古言あり。万葉
十九

ふ布敷賣流あ。○唾出を師云和名抄よ。唾和名豆波岐と
どれやあり。見え。字鏡よ。涎口水也。液也唾也。與太利。又豆波志留ま
液。小兒口所出汁也。豆波支あど有を。みあ其物を云を。體
言あるを。今は用言ふ云へ也。ちて此都婆伎てふ言ふ疑
中ふある水を津といず。吐津吐の意あるべし。然
るよ津字も都と云言もめと船此泊依所此名れまばそ
まをり轉して津液の津を毛都と云う。若然らむ古言
ふをのらで津字をり出とる言あり。さまと唾をえ。吐
とははとのさま等しうら糸。ちて此を棕子を咬碎きて。
む都婆久也訓むやあり。含とる赤土と和ある。吳公を咬破とるふ能似とるあ
依べし。○愛思而を波斯久於毛富志氏と訓はし。師云波
斯久は字此如く。愛慈しむ意ふて倭建命の波斯祁夜斯

を歌賜ひ。万葉あども多く見え。愛字を書る例も。彼集
ふ所也。大雀天皇の御歌ふ。阿賀波斯豆摩吾愛妻ありととみ
賜するも是あ也。あを彼処よ委く云べしけて此を大名牟遲神の多
加依吳公を少うも懼れ去て。咋破賜ふと思ひて。其勇を
感給ふあり。然まど其を御心の裏ふこ絶て。色よも出し
賜をぬと云ふとを慥ふ知さむ多末よ。於御心とは云ふ
あ也。上件蛇室。吳公。蜂室あども寝去め賜しふ事故あく
平くて出坐し時めまど野を焼廻しと依よ。無恙て矢を
持て獻也賜ひし時も。其度毎よ御心の裏ふを愛く思ひ
のら。其心を表ふ顯をし給はぬ故ふ。彼處くよ也。此語を

畧死て。今終の一事ふ如此云ふ古文此妙ある處あり。心
を著て味ふは也。古事記をさかしらを加すはて古文の
ある事此み多し。書紀を漢文を飾依とて。けりしを
此み加らまし故よ。中くふ古文の妙處を皆失終於け
て上の處く牙も。例のひぐのせある物ぞ如此有也。上件
種く此事を。みあ彼神を驗賜をむと此御所爲あると。
此一語ふて著し。今云師の此段此妙處を見得られとる。
心餘りて言よ演がと。此を人此親をありて。子を長ら
えむる道を知り。人の師と依りて。弟子を教ふる此道字
知ま依人を自然よ。今己が思ふ如く。此解の言よ絶て。等
く妙あるとを悟り。於べし。けを有れど。人此師と依り
親とあり。其子まど弟子を教ふる道を。辨牙得ざらむ間
を親はと師の然る愛しみの心裏よ有る依事とを得知
ざる物あまど是と師と依り親とあ
れ依人此常よ心得はき事ふざ也ける。

於是握其大神出御髮而。其室
 屋出每椽結著而。以五百引石。
 取塞其室戶而。負其御妻須勢
 理毘賣而。取持其大神出生大
 刀生弓矢。及其天沼琴而。逃
 出

出時。其天沼琴拂樹而。地動響
 矣。故其御寢出大神。聞驚而引
 什其室屋矣。雖然。解結椽出御
 髮出間。遠逃矣。故爾迄豫母都
 平坂。追到而。遙望而。呼大名牟

遅神而謂曰。其汝出所持出。以チノカミヲテノリタマハクソノイミシガモタルモチ
生大刀生弓矢而。汝出庶兄弟イクタチイクユミヤヲテイミシガマ、アニオト
者。追伏坂出御尾。追撥河出瀬ヲバオロフセサカノミヲニオロハラヒカハノセニ
而。意禮爲大國主神。亦爲宇都テオレナリオホクニヌレノカミトマタナリウツ
志國玉神而。以其我女須勢理シクニタマノカミトテヲソノアガムスメスセリ

毘賣爲嫡妻而。於宇迦能山出ビメシムカヒメトテニウカノヤマノ
山本。於底津石根宮柱太知。於ヤマモトニソコツイハネミヤバシラフトレリニ
高天原冰木高知而居。是奴耶タカマノハラヒギタカシリテヲレコヤツヨト
詔矣。大名牟遲神還坐而後。通ノリタマヒキオホナムヂノカミカヘリマシテノチニカヨヒ
坐其若須勢理毘賣命出時。於マスソノワカスセリビメノミコトニトキニ

ソノヤシロノマヘアリイハソノウヘイトナメラカナリスナチ
其社出前有石。其上甚滑也。即

云滑磐哉矣。故其地云滑狭也。

握御髮ハ。御頭の虱を取居を正ふれど。御髮を握よむ。本

と正便あ正。○椽ハ。師云字鏡ふ構櫨也。枿也。太利木。まこ

佐志乃。とめり。和名抄ふは。釋名云。椽在櫨旁下垂也。兼名

苑云。一名椽一名椽。和名太流岐。楊氏漢語抄。と有て。今世

ふも多流紀と云牙ど。多理紀ぞ理優れむ。字鏡の訓ふ依
ばし。○結著は。師云卧坐御髮を直ふ屋此椽ふ結著む。

程遠き心ちばまむ。此は別小緒を髮ふ結び續て結著と
せむ。然れど其在中くよ。くま。くま。聞也。免まむ直

小御髮を結著と見て有ふむ。今云。等く優れとる神れど

密承り傳。とるあとあり。然れば此大神の御髮の椽さ

ふ結著るむ。り。長う正む。事。然も有べき事あり。さ

て如此爲給ふ所以。此大神の御寢坐る間。此處を道

去むと思はる。跡を正追來坐むことを恐まて。其字留

奉年が爲あ正。其事次。○五百引石を。上小千引磐とある

類あり。○取塞は。師此登理佐閑氏と訓れ。依り依るし。
師まこ云。俗語よ。人の鬮あど。傍を。傍を。上ふ以千引磐
正取。さ。子。ると云も。是と正出。と依語あり。上ふ以千引磐
引塞其坂路。とある處。注せるが如し。第二十一段。○生

太刀生弓矢也。師云生ハ天神の饒速日命ヲ授賜へる十
種の寶也。生王足王也。神祇官ハ坐於八神の中。生魂
足魂と申は也。はと生嶋足嶋生圀足圀。まと出雲圀造
神賀詞也。今日能生日能足日爾。あどもある生ふて。皆命
長く生る意れり。足た。力あ。ぬこ。せ。はて此を執持主の。
命長々生ほき徳ある太刀弓矢也。右此如く。生某と云
びとるふ。此よ。生れ。み。ふ。て。足。の。無。き。は。生。ふ。足。を。兼
依。意。あ。る。べ。し。加。茂。大。人。右。此。生。魂。足。魂。生。圀。足。圀。を。共
ふ。そ。の。和。魂。荒。魂。を。分。て。る。あ。也。と。ぞ。云。れ。し。抑今豫美圀ふして。此物を得給ふ
は。例此凶をゆ吉をふはあやれぞ。○其天沼琴其と也。
上ふ其大神之也。有哉承て。同其大神之也。と師の説れ

多るが如し。天とは。此も師説の如く。何ふても其製状の
天上物小同じ也。を云。第五段此沼琴と云。沼也。天瓊戈を。
記よ。天沼矛と書とる沼と同じ假字ふて。瓊を云ふ古言
也。然れぬ沼琴ハ玉琴也。云が如く。瓊を飾付とる琴也。
天沼矛と思ひ合せて辨ふべし。然るも記傳小詔と誤
れ。る。本。よ。依。て。詔。琴。と。あ。て。解。れ。と。依。説。を。信。ぐ。と。し。さ
ま。と。許。登。と。云。名。義。を。解。れ。と。説。を。信。あ。ひ。依。べ。き。説。と
も。あ。れ。ぬ。今。を。詔。字。よ。就。て。の。説。ハ。省。を。捨。て。琴。の。説。れ。み
を。此。よ。は。て。許。登。て。ふ。名。義。也。師説小言所也。所を登を
注し。於。は。て。許。登。て。ふ。名。義。也。師説小言所也。云。例。多。し。
上ふ云り。さて登杯を切れを登と。然云ふ由也。まは古よ
ある。留。を。登。麻。流。と。も。云。が。如。し。然云ふ由也。まは古よ
何事よまま。神の御心を問むて。其命を請申はふ也。必
琴を彈也。于時其神。琴上ふ降來坐て。人よ著めて。命を詔

給ふ。此事也。訶志比宮段ふ。證等を擧て。委く云を合見て
知はし。仲哀天皇卷此傳見るべし。はと武烈天皇紀の御歌ふ。舉騰我
彌爾。積謂屢箇。皚比謎とある。上一句半は影と云む。序よ
て。琴頭ふ降來て坐く神の御影と云意よ連とるあ也。此
等を以ても。右此旨を知はし。來て詔言し賜ふ所と云意
あはること有ふ從ふ也。あ不此器此事ふ就て謂もる倭
と著し。と有ふ從ふ也。も有をそを既よ第五十四段の傳ふ注せりき合せ考ふべし。儲まと師説ふ。今か之。太
刀と弓矢を琴とを取持て。逃出とるふ。其中よ。太刀弓矢
残用ひし事は。次文ふ見えあるふ。此琴の用を見えぬ。多
拂樹而地動く事を云む料のみよ此物を奉む沈作物語
あどよあそ然ることをも有ら免案録ふをちる設りて云

後き謂ふし。まど如調ハ絃琴所治天下と云あ。然れむ
記中よあれど。其を譬あまむ。此よ由あくれむ。然れむ
是を取持て出給ふあ。何の由とも聞えがし。故熟く
思ふよ。上代よ。夫婦れ結びをれあよ。必女の親れ方と
也。智ふ琴を與りて。其を永く夫婦の中れ契とせし事ふ
ぞ有るむ。其詳ある據ハ未見當らぬと。吾妻也云名れ有
も。此故あるべく思也。後までも倭琴よ此名あり此を中
云説た名よ付て設はと今此琴を取持て出賜ふは。須世
理毘賣を妻とひる。表物とひる形るはし。然れむ。次文ふ。
父大神の詔ふ。其汝之所持之。以生大刀生弓矢云くとあ
ゆむ。太刀弓矢れ用を云ひ。次ふ。以其我女須世理毘賣爲

嫡妻とある所、琴の用をば籠と依る。儲夫婦の中を
絶せられ。其表、此琴、殊、此方、返し渡せしあるはし。
上の豫美、因、段、女、男、神、各、對、立、而、度、事、戸、を、あ、依、も、此、と
合せて思、予、ば、表、の、琴、を、女、神、の、方、は、返、し、度、は、と、云、意、此
言、ある、は、く、や。許、登、る、如、く、所、此、畧、う、ま、る、各、亦、依、あ、上、よ
五百引石を取、塞、室、戸、と、云、ひ、豫、母、都、平、坂、ま、で、追、到、と、云
ひ、其、外、も、彼、段、と、此、段、と、事、の、さ、ま、相、似、と、る、事、多、き、を、思
ひ、合、去、る、を、さ、て、此、大、名、牟、遲、神、此、今、豫、美、因、と、り、歸、り、て、
因、造、坐、と、せ、る、本、彼、上、此、豫、美、因、段、よ、因、未、作、竟、と、り、其、
業、を、紹、給、ふ、る、と、下、よ、委、云、く、如、く、あ、ま、は、彼、段、よ、
女、男、神、離、別、て、未、竟、と、る、事、に、業、を、今、此、神、持、と、遙、不、相、應、
て、紹、と、る、ふ、れ、未、竟、と、る、事、に、業、を、今、此、神、持、と、遙、不、相、應、
予、て、妙、の、御、時、よ、現、よ、事、を、思、予、但、し、加、の、伊、邪、那、岐、伊、邪、那、
美、大、神、の、御、時、よ、現、よ、事、を、思、予、但、し、加、の、伊、邪、那、岐、伊、邪、那、
れ、ど、も、然、云、て、夫、婦、の、中、を、絶、あ、と、く、あ、れ、る、詞、を、以、て、語、

傳、予、と、る、物、ぞ、河、海、抄、よ、和、琴、伊、特、諾、伊、特、冉、等、御、時、令、作、
出、給、云、く、と、云、る、を、採、あ、る、り、も、し、古、き、傳、へ、あ、ら、む、少、し、
此、よ、由、有、と、言、れ、と、依、甚、惜、き、考、あ、ま、ど、め、此、も、信、が、と、し、
て、き、こ、も、也、
然、も、有、ら、む、此、御、琴、を、何、の、料、小、取、持、て、逃、出、給、予、る、形、ら
む、と、云、ふ、彼、天、沼、示、れ、瓊、む、し、も、彼、處、よ、云、ふ、如、く、天、神、此
神、靈、の、璽、と、付、賜、予、と、通、も、る、小、合、せ、て、考、ふ、依、ふ、此、琴
を、須、佐、之、男、大、神、此、殊、小、愛、志、み、給、ふ、器、よ、て、その、飾、れ、る
瓊、は、し、も、其、神、靈、此、驗、と、付、給、予、む、む、を、因、作、堅、免、て、大
因、主、と、成、む、よ、む、此、大、神、の、神、靈、よ、頼、ら、て、大、造、之、績、の
建、は、じ、き、由、緒、を、所、思、坐、て、御、靈、を、承、賜、ハ、る、璽、此、器、と、せ
む、料、小、此、琴、字、取、持、給、予、依、あ、る、は、し、然、依、む、此、因、土、元、
と、り、須、佐、之、男、大、神

の治看して作堅給ふべき由ある上、件云、謂よとめ
て、豫母都圀よ入坐るを遺し置給へ、御子神等の造、堅
給ふと云へど、あ布大造之績と云む、此功を立ざ
るに、賜らむと物し給へる事と思、出雲風土記、飯石
も、其由あ布次くよ云を見て知べし、
郡琴引山、古老傳云、此山、峯有窟裏所造、天下大神之御琴、
長七尺、廣三尺、厚一尺五寸、又在石神高二丈、周四尺、故云、
琴引山とあり、此山を鈔、在來島、鄉由來村、山頂有権現、
窟、在し、琴とは、此の御琴と云、異ふる、
し、出於石、神とは、神の像し、石と聞ゆ、れ、
よ、存まると、此、ま、御琴と、石とは、言、
の、御世を、此、風土記を、記、せ、
し、き、物、あ、ら、び、
非、び、
訓、
俗、
い、
ふ、
突、
當、
あ、
り、
高、
津、
宮、
段、
ふ、
水、
潦、
拂、
紅、
紐、
も、
も、

あり、○地動響矣、
斗、
と、
ある、
處、
注、
志、
と、
ある、
處、
注、
も、
響、
動、
も、
書、
る、
は、
み、
あ、
り、
呂、
と、
云、
處、
あ、
り、
○
聞、
驚、
而、
ち、
師、
云、
上、
よ、
須、
佐、
之、
男、
命、
天、
小、
參、
上、
多、
る、
ふ、
時、
小、
山、
川、
悉、
動、
圀、
土、
皆、
震、
爾、
天、
照、
大、
御、
神、
聞、
驚、
而、
と、
あ、
る、
と、
ち、
此、
を、
聊、
異、
ふ、
て、
睡、
坐、
る、
が、
驚、
死、
て、
御、
目、
の、
覺、
給、
ふ、
を、
云、
あ、
り、
凡、
て、
物、
の、
音、
あ、
ら、
ず、
小、
驚、
く、
ふ、
は、
非、
で、
只、
小、
目、
に、
覺、
る、
哉、
も、
驚、
く、
と、
云、
予、
依、
あ、
り、
と、
物、
語、
文、
あ、
ら、
ず、
常、
多、
し、
今、
も、
或、
圀、
人、
の、
然、
云、
を、
聞、
し、
こ、
と、
安、
藝、
備、
後、
あ、
ら、
ず、
の、
圀、
く、
ふ、
て、
ち、
凡、
そ、
眠、
さ、
む、
る、
を、
驚、
く、
と、
云、
も、
其、
圀、
人、
ら、
云、
也、
垂、
仁、
天、
皇、
紀、
小、
寤、
と、

めろ也。万葉四小夢此相を苦有る也覺きて搔探れども
手小も觸れぬ是よて明らし。○引付其室屋と云。師云か
此椽毎よ御髪を結著とるをを知し看けでふを驚きて。
起立て出給ふのらふ御髪よ引れて室の仕ゆく也。○
雖然とは師云如此むり也勇猛き御勢力ふては何處ま
ても速よ追及給ふはきあまとも云外也。○遙は師云
波呂婆呂爾と訓べし。皇極天皇紀の謠哥よ波魯波魯爾
漏爾於忘か由流。○望を師云加茂大人此美佐氣氏と訓
可毛あどあ也。書紀あどよか。望字をラセルをも
まとるよ依はし。ホゼルをも訓を付とれども此言とし
うふ云依を見。万葉一ふ數く毛見放武八萬雄とある言。
祢む取ぐとし。

此字ふとく當れ也。振放見と云。○呼は余婆比と訓はし。
余毘を延とる言あり。師云豫母都平坂也。上よも見むて。
豫見因と顯因との交塚あまむ此大神は此塚よ也此方
牙は越出給ふこを能をば故此處ふして遙小望て呼賜
ふあ也。今云此大神の此塚を越出給ふこと能ざるを伊
八衢比古八衢比貴神まと投給へる御杖ふ成坐依久那
斗神湯津石村此如く塞坐して防護り給へむあり其を
道饗祭此祝詞よ大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等
之前爾申久八衢比古八衢比貴神まと投給へる御杖ふ成坐依
辞竟奉久波根因底因与利鹿備疎備來物尔相率相口會
事無氏下行者下乎守理上往者上乎守理夜之守日之守
尔守奉云くと有をもて知べし委くを第二十二段の傳
よ注せるを見けはて此神等の然守り給ふ塚をしも大
名牟遲神の往來し給ひまと須佐之男神給ふ属て彼因よ
入坐依須世理毘賣命の大名牟遲神と共ふ來給へるを

いゝおと云ふ上よ注る如く大名牟遲神の彼国子往坐
るは、大屋毘古神の御議よて八十神此難を遁れて須佐
之男大神の稜威此御霊を幸しめむと此御態亦云事
別ありまよ須世理毘賣命の彼国へ入坐る此も上よ
云る如く大御神此御詔として須佐之男神小属給へる
を思ふよ此神も志むらく彼国よ入て大名牟遲神の往
坐を待たぬ此神も志むらく彼国よ入て大名牟遲神の往
て共よ功を成給ふべき深き理ある事と思はるまは是
まよ今云ふ限 ○庶兄弟と云彼八十神を云ふ ○坂之御
尾は師云山の坂路此前乃長く延はすよる處を云ぬる
はし御を眞よ同じ ○河之瀬を師云坂小御尾といひ河
小瀬と云ふは多し詞此文よて案を多し坂を河ぬ也 偕
そ此坂も河もまよ詞の文りて案はら道の行手よ此
處よても彼處よてもと云こを云ふ 山といをて坂とい
ひまよ河よも瀬を

云むみお道路よ就て然るを如此言あせるは古文此麗
云ぬり瀬を渡瀬あり 美き趣あ也はと坂小伏と云ひ河小撥と云も言を加す
て文を成せるもれぞ ○意禮を師云人を賤免詔稱あ也
記中白檮原宮段小兄宇迦斯をも詔て云ひ日代宮段小
熊曾建をも云也書紀よ右此延宇迦斯を云るを爾と書
て此云飫例とあ也はと神代紀敏達天皇紀あせよ爾を
も作也 你を余や同と 枕冊子小田植る女此謠へ依歌よ
郭公よ意禮を加夜都よ意禮鳴てぞ我を田小立也 此も
よ田小立也 勞を苦みて郭公を詔よる詞あ也 中昔の軍
記あよ人よ詔て夜意禮と云こを多し是も夜を呼出
行をゆきおまあせ云も立おま行おれよて此の意礼あ

るはし、然るを轉して、まに立おつと、行わつと、亦ども云
記、まに今、世の俗言よ、た、自意礼と云ひ、人を詈よ、己をぬ
我とも云、た、古、け、て今、かく、詈、て、詔、牙、依、所、以、た、下、是、奴、と
を、相、反、あ、り、云、
ある處、よ、云、む、○大、因、主、神、名、義、を、師、云、天、下、を、伏、了、了、宇
志、波、久、神、と、云、意、あ、り、其、處、を、宇、斯、波、久、人、多、宇、志、と、云、主、
中、主、神、の、處、よ、○宇、都、志、因、王、神、宇、都、志、と、た、師、説、此、如、く、
云、る、が、如、し、
根、因、よ、あ、り、て、詔、牙、依、御、言、あ、る、故、よ、此、因、土、を、指、て、顯、見、因
とは、詔、牙、也、其、は、多、く、此、大、御、因、の、事、と、此、み、見、む、は、あ、り、
狭、し、根、因、よ、對、牙、と、依、御、言、あ、ま、た、廣、く、大、地、全、よ、係、ま、り、
王、を、借、字、よ、て、古、語、拾、遺、よ、顯、因、魂、神、と、書、さ、る、如、く、御、靈
あ、り、諸、か、く、似、多、る、御、名、を、二、抄、重、ね、て、詔、ふ、た、如、何、と、云

よ、大、因、主、とは、此、天、下、万、因、を、作、堅、終、て、其、を、宇、志、波、久、意、
顯、因、魂、を、た、因、經、營、る、功、業、を、成、竟、て、後、よ、顯、因、御、靈、此、神
を、成、て、天、下、よ、其、恩、賴、を、蒙、あ、む、る、神、と、云、意、よ、て、此、二、名
を、此、處、よ、て、は、未、此、神、の、御、名、よ、は、非、也、然、神、と、爲、ま、と、教
命、せ、賜、了、る、あ、り、是、ぞ、須、佐、之、男、大、神、の、稜、威、此、御、靈、を、幸
賜、ふ、處、よ、を、有、り、依、然、ま、た、大、名、牟、遲、神、此、因、作、竟、給、へ、る
後、よ、宇、都、志、因、を、皇、美、麻、命、よ、避、奉、り
て、幽、冥、事、を、治、看、り、事、と、成、終、る、は、既、く、此、よ、須、佐、之、男、大
神、の、御、詔、よ、定、給、了、る、事、よ、さ、り、依、故、後、よ、天、照、大、御、神
産、靈、大、神、此、勅、命、と、し、て、經、津、主、神、武、甕、槌、神、此、降、り、て、問
せ、る、時、よ、我、を、云、く、あ、り、て、治、免、賜、を、く、吾、を、隱、り、て、侍、を、む
と、を、白、給、へ、る、あ、り、其、を、第、百、十、五、段、け、て、後、遂、よ、功、業、を
と、り、次、の、傳、よ、注、ふ、を、見、る、べ、し、
成、了、此、教、命、此、如、く、爲、給、了、依、故、よ、御、名、と、を、爲、ま、依、あ、り、

師説をいまだ精のらば此。○其我女師云あひの比賣神今
は。大名牟遲神不屬從ひて坐故ふ。其と指て詔ふ也。○
嫡妻を。師云字鏡よ。嫡適牟加比女也見え。書紀は多く正
妃と云也。此等不依て訓法し。牟加比を。正く夫不對配意
也。物語文よ。今の妻此生る子をむらひむらと云ふ也。
先妻と別々て。今妻を云へれど。是も本は嫡妻腹を
り轉れ。○宇迦能山師云和名抄不。出雲国出雲郡宇賀郷
あり。此郷の西不何也。出雲御崎山と云まで連る也。鰐
淵山と云是あり。今云宇迦山を御崎山也。おきて。只峯
段。杵築の処よ引る。風土記抄の説を見て知べし。さて此
郷を宇賀と云由也。第百四段よ見也。亦不彼処の傳よ注
ふを見。○於底津石根宮柱師云式の祝詞どもに下都磐

根爾ともあ也。凡て上代不也。神宮も人の舍宅も。伊勢神
宮あぞ此製の如く。地を掘て柱を立る故よ。此稱辭ある
也。今世よも。銀が家よ是あり。掘立と云ふ也。石根也。
地上よ。石居をして柱を立る也。後の事あり。石根也。
故不礎を以て依ふ也。非也。地底不本と云ある石根まで。深
く掘て立ると云義あり。於高天原云くも。高き也。其也柱の
立るが堅くも。動れき由也。○太知は。本よは布加斯師
云。祝詞等不。太知立とも。太敷立とも。はと廣知立也。も。廣
敷立とも何也。其也加茂大人説よ。祈年祭詞よ。皇神能敷
坐嶋能八十嶋者云く。万葉二不。天皇之敷座固あど。知坐
字敷坐と云ふれ也。知と敷也。同じと有也。諸也此稱辭を。

古來^{イニヘヨリ}多^ク柱の上を此み意得れど。然^サ非^ハ也。今考^カる^ル。万
葉二^ニ。水穗之^{ミヅホ}。罔乎^{ミヤ}。神隨^{カミナカ}。太敷座^{フシカ}而云^ス。はと一^{ヒト}。太敷^{フシカ}爲^ス
京乎^{ミヤ}置^ケ而云^ス。はと二^{ヒト}。飛鳥^{アスカ}之^ノ。淨之^{キヨミ}。宮爾^{ミヤニ}。神隨^{カミナカ}。太布座^{フシカ}而
云^ス。れど何^ニる例^レを思^フふ。宮柱^{ミヤバシラ}太知^{フシカ}も。其主^{ミヤヌシ}の其宮^{ミヤ}を
坐^{マス}を云^フあ^ハ。太も右^{ミダヒ}の万葉^{マンヤフ}。柱^{ハシラ}あら^テ。罔^{ミヤ}を知^ル。坐^{マス}も云^フ
れ^ド。多^ク廣^ク大^キ。死^シふと云^フ稱^ナ辭^ジ。れ^ハ。太^{フシカ}御幣^{ミコヒ}。太^{フシカ}詔^{ミコトノコト}。戸^ド。太^{フシカ}
廣^{ヒロ}知^チ。多^クも云^フ。るぞ加^カし。か^ク。ま^バ。此^{コノ}語^{コト}を。專^カ柱^{ハシラ}よ係^カる^ル。よ^ハ
非^ハ。其宮^{ミヤ}此^{コノ}主^{ミヤヌシ}。係^カれる語^{コト}ある^ル。を布^フ。刀^{タガ}と云^フ。柱^{ハシラ}。縁^{ヨレ}何^ニ
る^ラ。宮柱^{ミヤバシラ}太^{フシカ}と云^フ。の^ノ。け^テ。兼^{カネ}て其宮^{ミヤ}。残^{ノコ}も祝^{イハ}。多^ク依^ヨ。物^{モノ}。あ
。万^{マン}葉^{ヤフ}。二^ニ。十^{ジュウ}。小^コ。麻^マ。氣^キ。波^ハ。之^ノ。良^{ヨシ}。宝^{ホウ}。米^メ。神代紀^{カムヤマトノキニ}。其^ノ。造^{ツクリ}。宮^{ミヤ}。之^ノ。制^セ。者^{モノ}。
。氏^{ウヂ}。豆^{マメ}。久^{キウ}。礼^{レイ}。留^ル。等^{トウ}。乃^{ナラバ}。能^ス。其^ノ。等^{トウ}。云^フ。神代紀^{カムヤマトノキニ}。其^ノ。造^{ツクリ}。宮^{ミヤ}。之^ノ。制^セ。者^{モノ}。

柱^{ハシラ}。則^{スレバ}。高^{タカク}。太^{フシカ}。云^フ。万^{マン}。葉^{ヤフ}。二^ニ。小^コ。真^{マキ}。木^キ。柱^{ハシラ}。太^{フシカ}。心^{ココロ}。者^{モノ}。云^フ。く。あ^ハ。柱^{ハシラ}。は。太^{フシカ}
を^ヲ。貴^キ。ぶ。あ^ハ。。縣^ノ。居^ル。大^{オホ}。人^{ヒト}。説^ク。ま^ハ。知^ル。を。敷^キ。て。柱^{ハシラ}。も。千^チ。木^キ。も。そ
酒^{サケ}。瓶^{ビン}。ど。も。を。繁^シ。く。並^ナ。ぶ。を。云^フ。祝^{イハ}。詞^{コトバ}。小^コ。瓶^{ビン}。上^ノ。高^{タカク}。知^チ。と。云^フ。ぬ。長^{ナガク}。高^{タカク}。き
説^ク。心^{ココロ}。得^ル。ば。ま^ハ。古^コ。事^{コト}。記^ス。ふ。此^{コノ}。稱^ナ。辭^ジ。三^{サン}。處^{トコロ}。小^コ。あ^ハ。る。み^ミ。あ^ハ。布^フ。刀^{タガ}
斯^ス。理^リ。と。此^{コノ}。み^ミ。有^ル。て。立^タ。と。云^フ。言^ハ。ふ。し。知^チ。立^タ。と。云^フ。依^ヨ。を。繁^シ。く。立^タ
も。引^ヒ。べ^レ。れ^ド。其^ノ。を。繁^シ。く。の^ノ。み^ミ。云^フ。て。語^{コト}。成^ル。ら^ズ。其^ノ。外^{ソノ}。此^{コノ}。前^{マエ}
後^{ノチ}。子^コ。引^ヒ。く。万^{マン}。葉^{ヤフ}。あ^ハ。づ^ク。小^コ。あ^ハ。る。敷^キ。も。繁^シ。く。よ^ハ。て。は。通^ト。え^ル。ぬ。ぞ。多^ク。き
宮^{ミヤ}。柱^{ハシラ}。太^{フシカ}。敷^キ。坐^{マス}。と。連^ル。と。坐^{マス}。よ^ハ。て。め^ス。主^{ミヤヌシ}。小^コ。係^カ。れる。言^ハ。ある。事^{コト}。を
知^チ。べ^シ。但^シ。し。瓶^{ビン}。上^ノ。高^{タカク}。知^チ。と。右^{ミダヒ}。此^{コノ}。説^ク。よ^ハ。て。を。聞^ク。ゆ^ヘ。れ^ド。も。他^ノ
の^ノ。例^レ。よ^ハ。合^ハ。ふ。故^レ。思^フ。よ^ハ。彼^ノ。は。高^{タカク}。と。の^ノ。み^ミ。云^フ。を。調^ト。ら^ズ。ぬ。故^レ。よ^ハ
千^チ。木^キ。高^{タカク}。知^チ。と。云^フ。あ^ハ。る。多^ク。古^コ。言^ハ。ふ。小^コ。高^{タカク}。知^チ。也^{ナリ}。天^{アメ}。之^ノ。御^{ミコト}。蔭^{カゲ}。天^{アメ}。知^チ
く。添^ソ。ふ。お^ハ。て。も。有^ル。れ^ド。万^{マン}。葉^{ヤフ}。一^{ヒト}。小^コ。高^{タカク}。知^チ。也^{ナリ}。天^{アメ}。之^ノ。御^{ミコト}。蔭^{カゲ}。天^{アメ}。知^チ
也^{ナリ}。日^ヒ。御^{ミコト}。蔭^{カゲ}。を。と。絶^ツ。る。高^{タカク}。知^チ。も。多^ク。高^{タカク}。知^チ。意^イ。ある。を。次^{ツギ}。く。の^ノ。天^{アメ}
知^チ。と。對^カ。へ^テ。調^ト。を。あ^ハ。さ^ス。む。と。米^メ。小^コ。知^チ。を。添^ソ。ふ。と。よ^ハ。そ^ノ。聞^ク。ゆ^ヘ。れ^ド。も。天^{アメ}
れ^ド。さ^ス。ま^ハ。ど^ク。此^{コノ}。等^{トウ}。の^ノ。知^チ。此^{コノ}。意^イ。ち^ニ。て。此^{コノ}。稱^ナ。辭^ジ。を。万^{マン}。葉^{ヤフ}。一^{ヒト}。小^コ。御^{ミコト}。心^{ココロ}。乎^{ナリ}
。猶^{ナラバ}。と^ク。考^カ。べ^シ。き^キ。れ^ド。也^{ナリ}。吉^{ヨシ}。野^ノ。乃^{ナラバ}。罔^{ミヤ}。之^ノ。花^{ハナ}。散^チ。相^{サマ}。秋^{アキ}。津^ツ。乃^{ナラバ}。野^ノ。邊^ヘ。爾^ニ。宮^{ミヤ}。柱^{ハシラ}。太^{フシカ}。敷^キ。座^{マス}。波^ハ。云^フ。く。は

と二ふ。眞弓乃崗爾宮柱太布座御在香乎高知座而まゑ
六。續麻成長柄之宮爾眞木柱太高敷而まゝ山代乃鹿
背山際爾宮柱太敷奉高知爲布當乃宮者乃多二十ふ。可
之婆良能宇禰備乃宮爾美也婆之良布刀之利多氏くあ
ど何也。○於高天原とは。師云滾くと云むとて。於底津石
根ぞ云ふ對子て。あゝ高知こぞを云古言あ也。大祓詞よ。
高天原爾耳振立聞物止馬牽立氏せあるも。あゝ馬此耳
高く振立と云ふと何也。此を高天原小坐神さちの耳振
の机。○氷木也。本よ此ふ立と心得る也。古言を知らぬも
也。師云。式の諸祝詞ふ多加るは悉く千木ぞ云也。常尔も

然云あるを古事記尔を三所よ出と依皆比岐也。今云
縣居大人の此氷字は垂字を字誤まるよて是も知岐と
訓べし。知岐を即垂木の多理字約免て知と云るあり也。
云ま志説此非を辨らまると和名抄古本よ。辨色立成云。
説有り記傳よ就て知るべし。和名抄古本よ。辨色立成云。
樽風板比宜。楊氏漢語抄説同。也何也。流布の板本ふ也。比宜と云
り大神宮延曆儀式小も。正殿一區云く。上樽風肆枚。長二
尺。弘八寸。號稱比木と見衣。同外宮儀式よも。比疑高知と
厚四寸。見えと也。此等ふても氷字誤。ちて名義は氷木千木共ふ
肱木ふて。其比知の下を省きると上を省けるとの差比
みあれむ本一。此名ある故ふ。通はして云依あ也。和名抄
知岐。功程式云。肱木。凡て物の形也。如此く依依を比
とあるは別物あり。

知せ云。手此肱も此意以て名けぬ也。はと肱金肱折れど
も同じ。其比をめと布理の切也と依ふて。布理せむ。右の
形の如く本は一、尔て斜に左右牙末に分れと依物を云
ふ也。和名抄に方言云河東謂樹岐曰叔桮和名末多布里
れれと云是あり振分髪と云も頭上をり左右牙分
とるはまを云と俗に道程あぞを云よ此處と彼處と
の中央は字布理分と云も此と出まとの物の正直うら
ぬ字布理の有を云けて此水木と云物を上代他家造ふ
も此と出と也屋此左右此端ふ有て其本は前後の軒を也して上也。
棟よて行合ふを組違ふて其末を長く上牙出しぬ依物
ふしむ其棟を也上へ高く出とる處を氷木とは云也。
或人伊勢神宮の千木此事を論ひて云貞和飭記に組目
上謂千木組目下謂榑風とあり後世に千木をむ別ふ作

る社も何まども伊勢ふて今榑風の末を切らぬ直よ
千木を用ふ也さて甚重き故に風穴を明るありと云
也。けぬ其を棟を也下ふては即多理木と竝て同じさは
有べしあ依故に古事記に椽字を當まよ屋の左右に妻ふて
は榑風と云物ある故に書紀に其字を當られと也。然
れども是らは棟をゆ下ふての名あまむ共ふ氷木よは
叶をぬあむぞ。此千木此端を扱こむ伊勢内宮外宮ふて
會易の理あど事あると外をそくと此差あ依よ就て
あむ尾張人吉見氏が云る如く内宮と外宮と状を變と
る此みふて何れ意○高知と也。本よ多迦斯理也ある
も有ほきよ非ぬ師云此もあむ。氷木此事のみ非ぬ主の其宮
て此字を
のきお字知坐をいふ高め上此太也同じく稱言あり。續紀に聖

武天皇即位の時此詔よ。天下乃政乎。彌高爾彌廣爾云々。
万葉六よ。吾大王の神隨高所知流稻見野能云々。まよ自
神代芳野宮爾蟻通高所知者山河乎吉三。あの歌もて意
得勿し。宮尔と云れバ宮此高きを云よ非也。天
は棟上牙高く上る物ある故ふ。其よ云かけて兼て其宮
をも祝と依あせ。全宮柱太知と云り同じ。万葉一よ。芳野
尔高殿乎。高知座而まよ荒妙乃藤原我宇倍尔食罔乎。賣
之賜牟登都宮者高所知武等云々。はよ六よ。和期大王乃
高知為芳野離宮者。まよ吾皇神乃高所知布當乃宮。ちて
者云く。是らも皆天皇よ係奉りて云へるを思ふ。ちて
此宮柱云く。氷木云く。せ云は。甚く上代と云。定れる宮造
此稱辭ふ。えて。甚も雅と依詞あ。神武天皇紀ふ。故古語

稱之曰於畝傍之檀原也。太立宮柱於底磐之根峻峙。博風
於高天原而始馭天下之天皇と見え。文字を漢風に書あ
し。式の祝詞どもふ多く見えて。神宮ふも。天皇の御殿ふ
も申せ。儲こ此宇迦山本此宮は。杵築大社とは別あ。己
杵築宮の事。第百二
十三段此傳を見べし。大國主命。天下を宇斯波伎坐依不
也。は。此宇迦山本宮ふぞ住坐らむ。○是奴を。師云二字を
連ねて。許夜都と訓はし。上の意禮此下ふ引る。枕冊子此
加夜都を。彼奴よて。共よ古言あ依勿し。今かの加夜都よ
夜都あることを知ぬ。さて今世俗語よ。是奴を許伊都
と云。彼奴を伎夜都とも。阿伊都とも云あり。はよ伊都
を云。誰奴あり。是らみあ。夜を伊を詛。云格此同きふ
ても。是奴は許夜都あること明らし。對馬あどよて。今

毛阿夜都許夜都曾^レちて上^レ不^レ意禮^レと詔^レひ。此^レ不^レ如此^レ詔^レ予
夜都と云と云へ^レ也。共^レよ裏^レよを甚^ク賞美^メと依^レ御心^もて。故^レよ表^レよ賤^ク然^レ詈^レ
賜ふ^レ也。今世^も然^レ事^多死^を思^合せて。其味^を知^ま。凡
て上^レ件^令寢蛇^室云^く也。種^々此事^と。此^レ御言^と全^ク同^ク
御意^旨あり。此^レ御言^を宣^ひのあしては。叶^たざる故^不追
も立^給えざらむ事^を思^してあり。はと大^國主^神も此^時
始^免て大^神の我^を苦^免給^予依^む。深^き御心^{あり}し事^を
知^給ひ。○還^坐而^ちあ^れ此^顯國^へ還^坐る^也。伊^那那^岐大^神
神^此根^國を^り還^坐る^時。禊^祓ひ^給ひ。伊^那那^岐大^神
豫^母都^戸喫^し給^へる^故。顯^國へ^ち還^坐る^に久^しく^坐於^れ
と^也。大^國主^神ま^と須^世理^比賣^命は^彼國^よ久^しく^坐於^れ
れ^む。彼^竈所^まて^煮炊^ぬる^物を^聞食^む。此^二神^の此^國の^物食^さり^や
不^容易^く還^坐し^まと^殊不^禊祓^ひ態^の也^し。其^を聞^えざ
依^む如何^と云^ふ。答^けら^く。此^二神^の此^國の^物食^さり^や

食^さび^や。其^を知^らば。假^令食^さら^む也。上^よ云^ふ如^く。此^レ
神^之の^彼國^に往^來し^給へ^る也。別^ち依^る所^以何^事あ
れ^む。伊^那那^岐大^神命^此還^坐る^に思^召せ^る也。由^縁異^れり。
ま^と還^坐して^後の^禊祓^ひ態^を有^らば。依^る無^りし^り。知^ら
此^レ道^理を^もて^思ふ^に必^ず禊^祓ひ^し給^ひら^む也。其^を○若^し
須^世理^比賣^命。若^し例^此稱^名不^て。別^ち依^る義^也。○社^也。
須^世理^比賣^命。此^常住^す依^る屋^代也。抑^此比^賣命^を。大^國
主^神の^嫡妻^を坐^せむ。共^に宇^迦山^本宮^に住^給ふ^る也。思^ふ
ふ^に。か^く別^ち御^屋代^{ある}也。上^代よ^も。神^等多^くは^一柱^也
扱^く。常^に離^れ坐^はして。通^ひ住^給予^依事^と聞^えぬ^也。
下^よも^也。其^の趣^よ。○滑^磐ハ。奈^米斯^波也。訓^を堅^石
見^ゆ事^も有^り。○滑^狭也。那^米斯^波の^斯波^を約^免て。佐^也云^ふ也。
例^也。○滑^狭也。那^米斯^波の^斯波^を約^免て。佐^也云^ふ也。

本書風土記云。神門郡滑狹郷郡家南西八里云々とて此傳を記し。故云南佐神龜三年改字滑狹とあり。和名抄云。當郡小南佐とも滑狹とも書て。二郷ある是あり。風土記抄云滑狹。神西市場二部三部常樂寺畑村等也といへり。神名式云。同郡小那賣佐神社。今本佐を伎よ誤まり。風土記云依て改む。同社坐和加須西利比賣神社あり。風土記云。奈賣佐社と云ぐ二社有て。竝在神祇官と云子依は即是あり。風土記抄云。滑磐石者在神西村岩坪山岩坪大明神。高倉權現之所坐。則祭須世理比賣與大穴持命。則那賣佐社也。神名式考證云。社記云。所謂磐石者在神西命。須世理比賣命。式内奈賣佐。兩社是也と云り。且有神西曰神待之處。大穴持命

來通須世理比賣命之時相待比賣于此處也。波加佐社是神待社也。又有羽加佐山と云云。波加佐社云風土記云。奈賣佐社小竝出て是も在神祇官と云る社あり。然依神名式云。此社字舉られざるを不審死とあり。さるを風土記云在神祇官といふる社の神名式云漏と依ぐ無まむあり。或説云。和加須西利比賣神社此次小竝出て。佐伯神社とあり。伯佐を下上小寫し誤れるよて。波加佐社あり。誤しと云云。然も有るし。

於是大國主神爲伐八十神而

造城矣。城名槌山出地是也。故
 八十神者。不置青垣山裡詔而。
 持其生大刀生弓矢而追避出
 時。每坂出御尾追伏。每河出瀨
 追撥而。因作始矣。其追廢出時。

追及坐出處云來次。亦此大神
 出射塚立而射出處者。即矢代
 鄉是也。亦令殖笑出處云矢内
 鄉也。

城在紀と訓を。御紀を始。古書ども志呂と訓る。紀を云名。義を加茂。大人は書紀。玉城宮とあるを。古事記。玉垣宮とある。就て。即加紀の畧ありを言。谷川

氏を築の畧ある師云必しも後世此城の如く。志多し。の
べしといへ。師云。必しも後世此城の如く。志多し。の
外ら秘せども。假そ米よ。垣也。ひ廻れし。構へある處あぞを
も云ふ。稻を積置く處を稻城馬を居しむ。○城名榑山
此を本書出雲風土記。大原郡城名榑山。郡家正北一里
百歩云くとて。此傳字記せ。同記抄。斐伊郷古城山也。
東北咸山以南小川以西大河也。俗呼云。劔崎と云へ。○
青垣山。此を下ふも往く出れど。一勢の山名。非びそ
は師説。青山。此圀の垣をありて。周廻れるを。倭建命此
御歌。多。那豆久。阿袁加岐。夜麻基母禮。流夜麻登志。宇
流波斯。と御詠まし。万葉一。疊有青垣山云。神賀詞よ。

出雲。圀乃青垣山。内爾。下津石根爾。宮柱太敷立氏云。ふ
ぞ猶。阿。山と云。びて。唯。青垣とのみ云。る例を。万葉六。ふ
芳野。離宮者立名。附青垣隱云。を。何。依。是。ありと。阿。眞
云。青。在。青。香山。青。菅山。此。青。の如し。此。所。在。須賀の宮所を
圍む山を云。ふれ。む。東北。須我山。林垣山。西南。高麻山
船岡山。ありて。塚を廣く遠く。八十神を追。撥ふを云。○持其生太力生弓矢云。師
云。あ。ふ。て。生。て。ふ。徳。何。ら。れ。ぬ。也。○每坂之御尾云。
每河之瀬云。師云。二の每は。處。ふ。て。戰。賜。ふ。度。每。ふ。勝
給ふと云。ふ。と。を。如。此。雅。ふ。言。あ。せ。る。ハ。ま。と。古。文。の。巧。後
世。此。及。む。終。所。あ。也。万葉十八。可波乃。○圀作始矣。ハ。師
云。下。よ。此。圀。作。賜。ふ。事。の。定。阿。作。と。を。卷。首。ふ。修。理。と。阿

依字の意あり。抑此因作此事也。上の豫美因段は伊邪那岐命此吾與汝所作之因未作竟故可還と。伊邪那美命お詔ひしうぢも云く此所以よて得還坐さて止ふしを。其伊邪那美命よ依坐て豫美因を所知須佐之男大神此御裔お坐び此神此其大神此御威靈ふとて。御威靈よと刀生弓矢を得給ふ事彼業を紹て功を成給ふと彼と此を相照し考へて。深き所以ある事を知べし。○來次は伎須伎と訓はし。下よ引く支受支社を式よ來次ととも書けり。けりて此來次の事也。本書風土記よ大原郡來次郷郡家正南八里抄よ來次郷西日登東日登寺領中谷來次市等五所也とあり和名抄よも同郡よ來

次郷と所造天下大神命詔八十神者不置青垣山裏詔而追廢時此處追次坐故云來次とあるを採れ也。但し此追字本どもよ義迢以生とあるは写誤あり。追次右追及あり。伊邪那岐神を伊邪那美神の追坐依事也。古事記よ追斯伎とあり。志伎字須伎と云るは書紀よ味鉏高彦根命とあるを古事記よハ阿遲志貴高日子根神とあるもて此等を考へ合せて追及云くと文を成抄道を追及ぶを斯久と云と師の言まよ依が如し。八十神字追及て來給へ依地ある故よ來次と云由あり。俗よ追付といふ。第二十二段のけりて風土記よ同郡よ支須支社といふ有て在神祇官と云あり。風土記抄よ屋裏郷宇治即神名

式。同郡。來次神社とある是也。大國主神を祭れる
あるはし。○射塚を阿牟都知と訓はし。和名抄射藝具條
小。揚氏漢語抄云。射塚以久波止古路。此間云阿無豆知。今
又用。とあり。以久波止古路を的所也。阿無豆知を今阿
豆知云。即的を立て弓射る場をいふ。○矢代郷ハ。本書
小。大原郡屋代郷。郡家正北一十里一百一十六步。所造天
下大神之塚立射處故云屋代。神龜三年。即有正倉とあり。
抄。并東西三代為一郷と云へり。其正倉ハ。同記。不在。
和名抄。當郡屋代郷見え。其正倉ハ。同記。不在。
神祇官とある社此中。屋代社とある是也。依べし。抄。小。
郷三代村。貴船大明神也とあり。祭神を決めて大國
主神あるはし。貴船を云。後の非説あるべし。○笑

は。和名抄征戰具。箭釋名云。笑和名夜とあり。令殖と云。
戦ひ給ふ時のおと。はと殖を。宇いをも訓はく。字ある
む。矢竹を殖生し給ふ所と云。依も有べし。本書小。同
郡屋裏郷。郡家東北一十里一百六十步。古老傳曰。所造天
下大神之殖。笑給處。故云矢内とあり。抄。小。宇治南賀茂中
倉新宮。近松砂子原。立原大崎等。十二所也。村。延野。大竹。猪尾。岩
と云へり。和名抄。同郡屋裏郷あり。はて矢代。矢内
二。此故事は。必しも此時の事を所思。故と。因。此處。小
文を成せるあり。

カレソノヤガミヒメハゴトサキノチギリノミト
故其八上比賣者。如先期美斗

阿多波志焉。爾其八上比賣者。
アタハシツカレソノヤガミヒメハ
 雖率來坐。畏其御嫡妻須勢理。
ドモアテキミツレカレコミソノミムカヒメスセリ
 毘賣而其所生子者。刺挾木俣。
ビメラテソノルウミセミコヲバサレハサミキノマタニ
 而返矣。故其子出名云木俣神。
テカヘリマレキカレソノミコノミナラマラスキノマタノカミト
 亦名謂御井神。此者座摩出御。
マタノミナハマラスミノカミトコハアガスリノミ

巫出伊都伎奉神也。

八上比賣。師云延佳本。神字のまぜ。前後此名。神と云。
カムノコノイツキミツルカニナリ
 依例無れ。無ぞ宜き。○如先期。八上。在此比賣神の。八
ゴトサキキリ
 十神。答給。予の言。吾不聞。汝等之言。將嫁。大名牟遲神。
カ
 とある。耳。あま。とも。彼時。既く。契約。を有。ぞ。おらむ。○
ハヤチギリ
 美斗阿多波志焉。師云。邇く。藝命。此大御歌。よ。佐禰。杼許母。
ミトアタハシツ
 阿多波怒加母用。とある。聯。さま。と。合。せて。思。予。む。美斗。は。
ツキ
 美斗能麻具波比。の。美斗。と。同。く。彼。佐禰。杼許。と。同。阿多波。
彼佐禰杼許と同
 志。は。阿多比。を。延。と。依。例。此。古。言。よ。阿多比。阿多布。あ。と。

之活用言れり。けり神代紀下。幸之はと雄略天皇紀。
與一夜而娠アタレトヨテハムリマシ奉與一宵アタハヒトヨとも與アタあど有ルも其事コト尤
知らまぬれども言れ意をいさど詳サカし思得ヒばト云御手ミテ也
どを痛く誤あり。夫を今世も手を掛と云より思ひこれ
依りや然まど美斗と云で佐祢村許母を云るを如何
む強シて嘗コトふ云ば彼大御歌小奥津藻邊爾者雖寄ト比比
詔ひまど眞寢床毛と云をツケル連有を思ふ。阿多布コ此
を彼と一ツ寄著意ヨリツクあらむ。雄略天皇紀の與字も共
けり意を取れる外ツ也。此與字を人小物を與る意よて阿
然れむ美斗阿多波須と云。一ツ寄會ヨリて御寢所を與トモふ
賜ふ意あらむ。須チて人小物を與と云を令阿多波の波
須を約とる例の言よて是も其物を其

人よ寄せ著る意より出ぬ米れむ右の阿多布と此も本
右一ツ小落めりまど漢文よ不能を阿多波受を訓む字書
よ能は勝任也と有意よて多聞受と云よ同じ故思ふ
勝任も本阿多布流の阿を省るあらむ。不堪を阿閉
受とめ云字も思ふべし。加む勝任を其事よとく至
能著意不勝を其事よ得至り著意あるはし。然まむ不
納采まど聘あどを阿多布と訓む。言も事も近れど
別れ。○雖ドモ率來坐キミシは。因幡をツ出雲小。大國主神の率來キま
せるあツ也。○畏カレむ。八上比賣此畏み坐依れツ也。其む下小嫡
后キサキ此甚く嫉妒ウヤリみ給ふ。大國主神和備ワビて倭國よ上坐む
と將給ミする事有れむ。然る事を聞し。畏み坐るあ依ヒば
し。○刺挾刺サレハササレをめぐ軽く添と依辭あツ也。○返カヒむ本國因幡
ふあツ也。○御井神ミノイノカミと云。師説の如く。此神處く小井を作ツて

民の利を^係あし賜子^係依御功^係あ^係しし^係ふ^係因て^係稱奉^係れる御名
あ^係依^係るし其御社^係を^係未^係於^係出雲風土記^係に^係秋鹿郡^係に^係御井社
鈔^係に^係在^係佐田^係に^係あ^係る^係神祇官^係と^係見^係ゆ^係神名式^係に^係同郡^係に^係御
井神社^係と^係あ^係る^係是^係あ^係る^係は^係と^係出雲郡^係に^係も^係御井社^係あ^係る^係在^係
神祇官^係を^係見^係ゆ^係式^係に^係同郡^係に^係御井神社^係と^係あ^係る^係是^係あ^係り^係
風土記鈔
よ^係有^係漆沼^係郷直江村^係御井大明神^係也^係と^係云^係へ^係り^係は^係と^係大和国宇陀郡^係に^係御井神社^係
此社
に^係檜牧村^係と^係云^係よ^係在^係て^係今^係は^係食^係美濃国多藝郡^係に^係御井神社^係
井大明神^係を^係考^係證^係ふ^係云^係へ^係り^係
各務郡^係に^係御井神社^係
和名抄
三井村^係に^係あ^係る^係御井大明神^係と^係云^係とい^係へ^係り^係考^係證^係よ^係も^係三井村
北一里^係餘^係の^係紀^係ふ^係七月^係美濃国厚見郡^係無位伊奈波神^係奉^係授^係
和十五年^係の^係紀^係ふ^係七月^係美濃国厚見郡^係無位伊奈波神^係奉^係授^係
從五位下^係と^係あ^係る^係是^係は^係と^係云^係り^係御母神^係の^係稻羽^係に^係神^係あ^係る^係

を思^係ふ^係然^係但馬国養父郡^係に^係御井神社^係に^係あ^係る^係也^係
○名神
御井神社^係一^係座^係と^係あ^係る^係也^係
○座摩之御巫
座^係摩^係之^係御^係巫^係に^係あ^係る^係也^係
傳^係見^係る^係べ^係し^係
神名式^係に^係御井神社^係西院^係に^係坐^係御巫^係等^係祭^係神^係に^係あ^係る^係也^係
三座^係の中^係に^係座^係摩^係巫^係祭^係神^係五^係座^係
並大月次新嘗
生井神^係福井神^係綱長
井神^係波^係比^係祇^係神^係阿^係須^係波^係神^係と^係あ^係る^係也^係
清和天皇紀
貞觀元年^係正月^係九^係日^係奉^係授^係神祇官
生井神^係福井神^係綱長^係井神^係波^係比^係祇^係神^係阿^係須^係波^係神^係並^係從^係四^係位^係上^係と^係あ^係る^係也^係
縣^係居^係大^係人^係説^係よ^係座^係摩^係之^係本^係
攝津国西成郡^係の^係所^係名^係ふ^係て^係式^係に^係も^係同^係郡^係に^係同^係神^係の^係社^係に^係あ^係る^係也^係
今^係云^係此^係社^係に^係下^係に^係別^係に^係記^係
し^係出^係て^係委^係く^係注^係を^係見^係べ^係し^係
右^係に^係神^係等^係を^係祭^係る^係祝^係詞^係に^係皇^係神^係能^係
敷^係坐^係下^係都^係磐^係根^係爾^係宮^係柱^係太^係知^係立^係云^係と^係云^係依^係ふ^係も^係依^係る^係ふ^係古^係
と^係云^係此^係大^係神^係に^係敷^係坐^係し^係處^係に^係仁^係德^係天^係皇^係宮^係作^係し^係給^係ひ^係て^係宮^係中^係

不齋給ひし故不其後大和山城と京を遷さまてても同く
遷し齋れて其處を即座摩と云しあらむ座摩此座を令
集解よ居とも書れむ爲を訓去を定うれ也然て居も座
も摩を借字よて井之後と云所名ふや有らむと言れし
は寔然る説也然るまよ井之塘もやとも言まし其
を伊勢国朝明郡ふも式よ井後神社と云ぐ有まむ也
此社はいま柿村 けて祈年祭の時ふ此神等ふ白比祝詞
と云よ在とぞ
不座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久職負令よ
る所の義解よ在女曰巫也と見え延喜臨時祭式よ凡座
摩巫取都下国造氏童女七歳己上者充之若及嫁時申辨
官充替と見也一本ふ都字を部と作り巫を加牟乃古と
訓依ハ神之子ありさて御巫を此外よも神祇官八神の

御巫御門御巫生島御巫おど各別生井神名式よ生井神
ある故も座摩乃と云へるれり津長井紀式ともふ
榮井福幸おどを言意をもふ同じ津長井網長井神と
あり訓を同じさて此三名を御井神の御名を種くよ稱
牙よ釣瓶の綱長井と申は井此深き水令やうある
故よ由よの綱長井と申は世の阿須波波比支此二神の
長き由よの綱長井と申は世の阿須波波比支此二神の
不第七十四段登御名者白氏稱辭竟奉者例此言あり
子委く注せ也皇神能敷坐下津磐根爾考ふ云右神とち彼座摩
正地事この文よて知らる今京を建給ひし時園神韓
坐あ社を宮内省ふ祭らゆ類ありさて其座摩を難波
神此社を宮内省ふ祭らゆ類ありさて其座摩を難波
宮の時此事あるを大和山城の都よても古よ準宮柱太
へてかくを称申し給ひらむこと上ふ云が如し
知立高天原爾千木高知氏此言此こと委く注り皇
御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氏瑞御舍此こと委く注り天

御蔭日、御蔭登隱坐氏。考は御を眞あり天を覆ひ日を覆成せるれ也とあり。或説は天は雨此借字にて雨を防ぎ日を防ぐ由をかく云成せる也と云へ也。案然も有也。四方、固乎安固登平久知食故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久登宣と何也。まよ月次祭の祝詞はて臨時祭式も御井祭を云見え。其祭の品々を見れば、まよ御井并御寵祭とも有て、寵神を一、小祭給ふこをも有也。然る品々を一、よ挙師言の如く、井を殊よ重くはるべき處あるとまよ也。師言の如く、井を殊よ重くはるべき處あるとまよ也。誰家も分く小隨ひて。此神をば齋奉るは交物ぞ。此本神名式よ。攝津、固西成郡、小坐摩神社。大月次新嘗何也。まよ上よ記せる縣居大人説よ。謂也。依神祇官小坐座摩神

此本社也。清和天皇紀よ、貞觀元年正月廿七日、攝津、固坐摩神、從五位下とあり。百鍊抄、元仁元年四月十三日、此社の門荒垣等の焼とる。はと和泉、固和泉郡よ付て、軒廊御トありしと見也。積川神社五座とあるも、右五神を記るとし、彼社記も見也。と考證よ云牙也。固史よ、承和九年十月奉授、无位積川、和泉、固從五位上、積川神、從四位下、貞觀六年三月廿三日、授、從四位下、積川神、從四位上、同十五年四月五日、授、と云牙也。

○門人岩崎長世、久保田綱根、佐藤昌信ら云、おれの十七此卷を、櫻木小勞托をらせて、紙小う扱して、其花れ咲みてるが、おと。天の下小て、言はせむと、はるは、美濃、固惠那郡附地、村小、古くよゆせく、村を、は、免、玄、依、田口慶成、又

其おれじ里長。曾我常昌ら相議了。まゝ初帙よ了次くを。彫刻志ある人々此功績戎合せて。かゝは成ある小那む。

○門入忠御身世。又畷田贈財。武新昌高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

五五。一。御身。高之云。其地ノ十

